

第2章 インドのインダス遺跡

ジャンムー＝カシュミール州

Jammu-Kashmir

この地域におけるインダス遺跡は数少ないものの、マーンダー遺跡における先文明期の黒色帯土器様式を特徴とする文化層の存在およびシュリーナガル盆地のブルザホーム遺跡におけるコート・ディジー式土器の出土など、先文明期終末頃の平原部と山間部の交流を示す資料は重要である。西のポトワール盆地におけるコート・ディジー文化の存在(サライ・コラー遺跡)も含めて、コート・ディジー文化の山間地域との関係を明らかにしていく必要があるだろう。おそらくは例えば木材といった山間地域の資源の利用を目的としたものと推定される。

1 ブルザホーム遺跡 Burzahom

この遺跡では発掘調査によって4期に及ぶ文化編年が提示されている。I・II期は新石器文化、III期

は巨石文化、IV期は初期歴史時代に属する。ここではI・II期について紹介する。I期は自然堆積層に掘り込まれた円形・楕円形・矩形の竪穴式住居を特徴とする。土器、磨製石器、石皿、骨角器が出土している。II期になると竪穴住居が埋没したあとに掘立柱式の建物や日干煉瓦積建物がつくられる。人と動物の埋葬が多数検出されている。狩猟の場面を描いた線刻画を伴う板石、土器、石器、骨角器が出土しているが、注目されるのはパンジャブ平原方面から搬入された可能性の高いコート・ディジー式土器と、東アジアの石包丁に類似する収獲用石器である。II期の最上層では銅製石鏃が1点出土する。山岳地帯と平原部の交流を示す重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

T.N. Kazanchi (ASI)

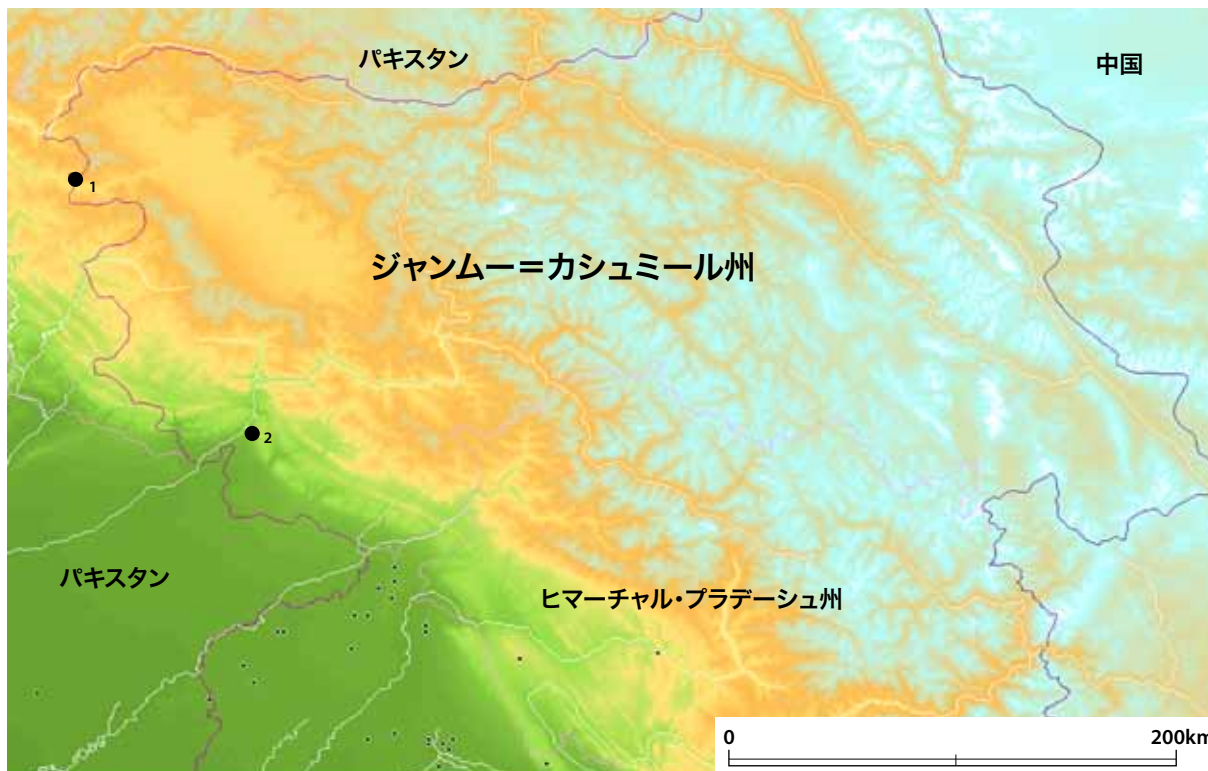
【所在地】

Srinagar District

【緯度・経度】

34°10'N, 73°54'E (Ghosh 1989: 86)

【発掘調査年度】



ジャンムー・カシュミール州におけるインダス関連遺跡の分布

1960 (IAR 1960-61: 11), 1961 (IAR 1961-62: 17-21), 1962 (IAR 1962-63: 9-10), 1964 (IAR 1964-65: 13), 1965 (IAR 1965-66: 19), 1966 (IAR 1966-67: 16-17), 1968 (IAR 1968-69: 10), 1971 (IAR 1971-72: 24), 1973 (IAR 1973-74: 15)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Sharma, A.K. (2000) *Early Man in Jammu Kashmir & Ladakh*. Agam Kala Prakashan, Delhi.

Pande, B.M. (2000) “Burzahom Beads”, in M. Taddei and G. de Marco (eds.) *South Asian Archaeology 1997*. ISIAO, Rome. pp.383-395.

2 マーダー遺跡 Manda

この遺跡では3期に及ぶ文化編年が提示されている。I期はIA期とIB期に細分され、前者ではハラッパー式土器と先文明期に系譜をもつ黒色帯土器が、後者ではハラッパー系土器と灰色土器、彩文灰色土器が伴出する。II期は初期歴史時代、III期はクシャーナ朝期に併行する。文明期からポスト文明期、さらにその後の彩文灰色土器文化期への移行を考える上で重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

Jagat Pati Joshi (ASI)

【所在地】

Jammu District

【緯度・経度】

36°56'N, 74°48'E (Ghosh 1989: 275)

32°54'00"N, 74°48'00"E (Possehl 1999: 794)

※ Possehl の緯度が正確である。

【発掘調査年度】

1976 (IAR 1976-77: 19-23)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書

Joshi, J.P. (1993) *Excavations at Bhagwanpura 1975-76 and Other Explorations & Excavations 1975-81 in Haryana, Jammu & Kashmir and Punjab*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.89. Archaeological Survey of India, New Delhi.

Joshi, J.P. and M. Bala (1982) “Manda: A Harappan Site in Jammu and Kashmir”, in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp. 185-195.

- (2) その他の参考文献

パンジャブ州

Punjab

この地域では18ヶ所の遺跡の発掘調査が実施されているが、報告書が刊行されている遺跡はなく、文化編年も決して十分に明らかになっているとはいえない状況にある。断片的に公表されている資料から推測すると、先文明期には黒色帯土器様式が広がり、文明期にはサトレッジ川流域からガッガル川流域にかけて広くハラッパー文化の要素が分布するようになる。また、文明期にはバーラー式土器が在地の土器様式として存在した可能性があり、ポスト文明期へと続く。ただし、バーラー式土器の成立および展開過程は明らかでなく、またハラッパー式土器との関係も判然としない。後述のハリヤーナー州と合わせて、パンジャブ地方東部もしくはガッガル平原における文化変遷の実態の把握が急務である。

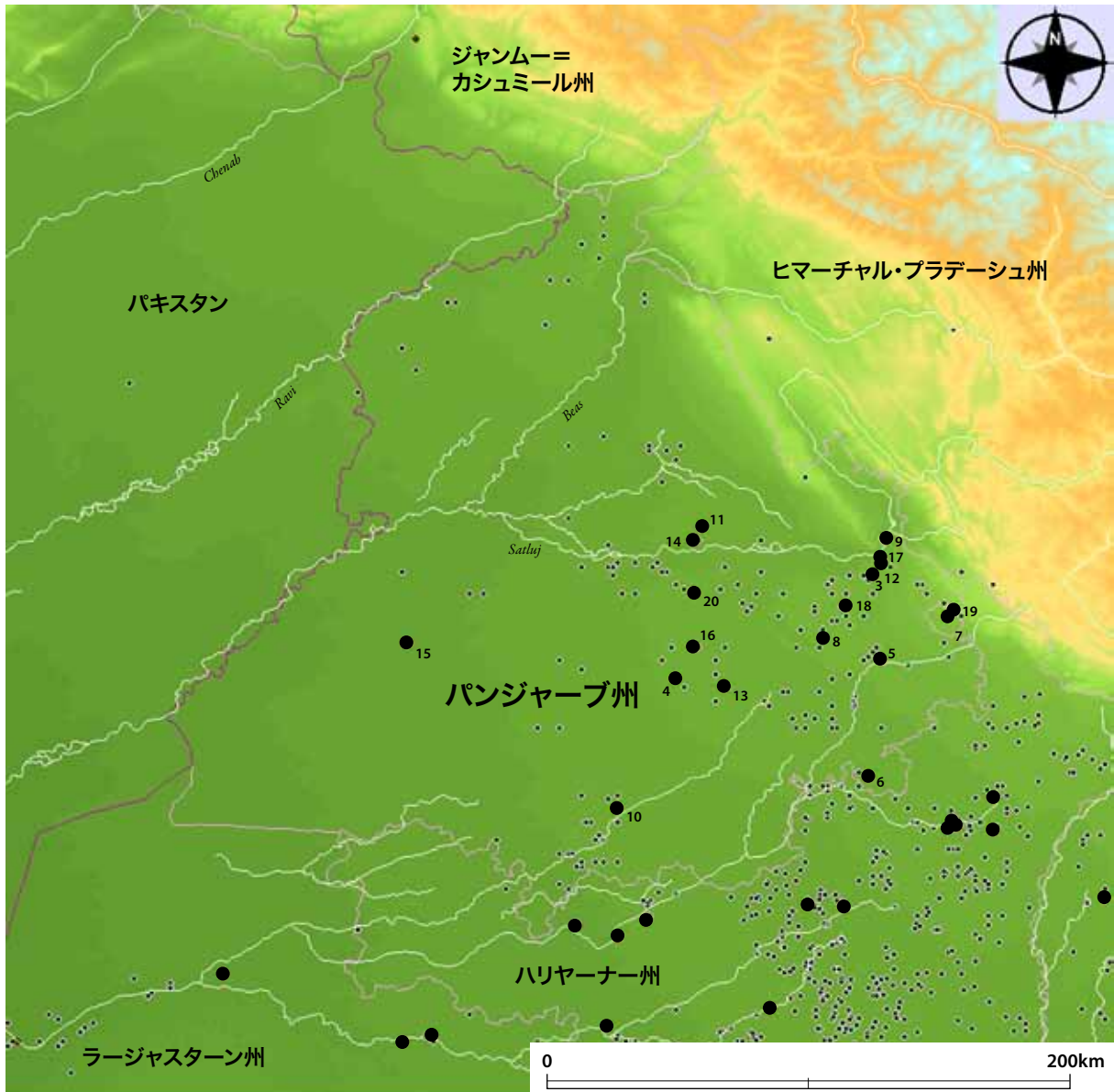
3 バーラー遺跡 Bara

サトレッジ川流域に所在するこの遺跡は南北550m、東西300mを測る遺跡である。発掘調査の結果、4mに及ぶ文化層は上・中・下層に細分されるが、一貫してバーラー式土器が出土する。中層においてのみハラッパー式土器が伴う。このほか、土製・ファイアンス製腕輪、土製・瑪瑙・紅玉髓製玉類、板状土製品、動物土偶などが出土している。すでに述べたように、パンジャブ地方東部における在地系の土器と目されるバーラー式土器の標式遺跡であ



バーラー遺跡 遠景

(撮影：上杉彰紀 ©上杉彰紀)



パンジャブ州におけるインダス関連遺跡の分布

るが、残念ながら報告書が刊行されておらず、バーラー式土器の実態が判然としない。

【発掘調査機関】

Y.D. Sharma (ASI)

【所在地】

Ludhiana District

【緯度・経度】

30°17'N, 76°47'E (Sharma 1982: 143)

30°54'N, 76°30'E (Possehl 1999: 735)

【発掘調査年度】

1955 (IAR 1954-55), 1971

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Sharma, Y.D. (1982) "Harappan Complex on the Sutlej

(India)", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

4 ブダーン遺跡 Bhudan

きわめて短文の説明しかなく詳細は不明であるが、IA期：前期シースワール文化、IB期：後期シースワール文化、IC期：ポスト文明期（後期ハラッパー文化）に細分される分可変年が設定されている。シースワール文化もしくはシースワール式土器の変遷および編年をいかに位置づけるか、ガッガル平原の文化編年の構築にきわめて重要なところであり、他の遺跡も含めて詳細な報告が俟たれるところである。

【発掘調査機関】

Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Sangrur District

【緯度・経度】

30°12'N, 75°53'E (Ghosh 1989: 75)

30°31'00"N, 75°46'00"E (Possehl 1999: 740)

【発掘調査年度】

1975 (Suraj Bhan and Shaffer 1978)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Suraj Bhan and J.M. Shaffer (1978) *New Discoveries in Northern Haryana. Man and Environment* 2: 59-68.

5 ブラース遺跡 Brass

この遺跡では発掘調査によってポスト文明期から中世にかけての文化編年が確認されている。それによれば、I期：ポスト文明期（後期ハラッパー文化）、II期：彩文灰色土器文化期、III期：クシャーナ朝期、IV期：中世である。ポスト文明期の文化層では遺構は検出されていない。

【発掘調査機関】

K.K. Rishi and K.S. Sidhu (ASI and Punjab State Department of Archaeology)

【所在地】

Patiala District

【緯度・経度】

30°35'00"N, 76°32'00"E (Possehl 1999: 742)

【発掘調査年度】

1990 (IAR 1990-91: 59), 1991 (IAR 1991-92: 90-91), 1993 (IAR 1993-94: 90-91), 1994 (IAR 1994-95: 26-27)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

6 ブルジュ遺跡 Burj

150×150m、比高差3mを測るこの遺跡では、発掘調査によって、A・B2時期からなる文化層序が確認されている。出土した土器はソーティ＝シースワール式土器およびバーラー式土器に類似する土器

で、文明期前後の時期が推定されるが、短文での報告のみで詳細は不明である。

【発掘調査機関】

Manmohan Kumar (Kurukshetra University)

【所在地】

Patiala District

【緯度・経度】

30°09'00"N, 76°29'00"E (Possehl 1999: 743)

【発掘調査年度】

1977 (Manmohan Kumar 1984)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書

Manmohan Kumar (1984) "A Note on the Excavation at Burj (1977), District Patiala", in K.V. Ramesh, Agam Prasad and S.P. Tewari (eds.) *Svasti Śri: Dr. B. Ch. Chhabra Felicitation Volume*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp.319-323.

- (2) その他の参考文献

7 チャンディーガル遺跡 Chandigarh

パンジャブ州およびハリヤーナー州の州都であるチャンディーガルに所在するこの遺跡では、彩文土器、高杯、ゴブレットなど、文明期の遺物が出土している (IAR 1970-71)。土器片の中にはインダス文字を刻んだ例も確認されている。あわせてソーティ＝シースワール式土器およびバーラー式土器に類似する土器も出土している (IAR 1970-71)。1985年度の市街地開発に伴う調査では、IA期：文明期、IB期：ポスト文明期（バーラー文化）からなる文化編年が層位的に確認されている (IAR 1985-86)。

【発掘調査機関】

N.C. Ghosh (ASI) and S.S. Talwar (Punjab State Department of Archaeology) in 1970-71

D.P. Rai (ASI) in 1985-86

【所在地】

Chandigarh

【緯度・経度】

30°40'N, 76°50'E (Sharma 1982: 157)

30°42'N, 76°54'E (Ghosh 1989: 94)

30°45'00"N, 76°47'00"E (Possehl 1999: 746)

【発掘調査年度】

1970 (IAR 1970-71: 7-8), 1985 (IAR 1985-86: 15)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
 (2) その他の参考文献

Pande, B.M. (1972-73) Inscribed Harappan potherds from Chandigarh. *Purātattva* 6: 52-55.

Sharma, Y.D. (1982) "Harappan Complex on the Sutlej (India)", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

8 ダデーリー遺跡 Dadheri

層厚 6m に及ぶ文化層は I 期と II 期に分けられ、I 期は A・B2 期に細分される。IA 期はポスト文明期に相当し、粘土造建物と小屋状建物が検出されている。銅製品やファイアンス製腕輪、動物土偶などが出土している。IB 期にはポスト文明期のバーラー式土器とともに彩文灰色土器が出土し、ポスト文明期からその後の文化期への移行を示す。3 面の遺構面が検出されており、下位の遺構面では平面半円形の小屋状建物と祭祀遺構とされる楕円形焼土遺構が、中位の遺構面では粘土造建物が、上位の遺構面では焼成煉瓦積建物が検出されている。II 期は中世期に相当する。

【発掘調査機関】

Jagat Pati Joshi (ASI)

【所在地】

Ludhiana District

【緯度・経度】

30°40'00"N, 76°19'00"E (Possehl 1999: 749)

【発掘調査年度】

1976 (IAR 1976-77: 43-44)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書

Joshi, J.P. (1993) *Excavations at Bhagwanpura 1975-76 and Other Explorations & Excavations 1975-81 in Haryana, Jammu & Kashmir and Punjab*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.89. Archaeological Survey of India, New Delhi.

- (2) その他の参考文献

9 デール・マージュラー遺跡 Der Majra

106×94m、比高差 4m を測るマウンドをもつこの

遺跡では、2 期からなる文化編年が明らかにされている。I 期は文明期、II 期はポスト文明期に属する。I 期には少なくとも遺跡の北側に盛土による周壁が存在したことが確認されているが、II 期には廃絶する。II 期には、埋没した周壁上部が墓地として利用されている。ファイアンス製品や土偶、チャート製石刃・おもり、準貴石製玉類などが報告されている。

【発掘調査機関】

Olaf Prufer (Harvard University)

【所在地】

Rupnagar District

【緯度・経度】

31°03'N, 76°37'E (Ghosh 1989: 76)

31°02'00"N, 76°33'00"E (Possehl 1999: 754)

【発掘調査年度】

1953 (IAR 1953-54)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書

Prufer, Olaf H. (1952) *Report on the Trial Excavation Carried Out at Khilokhiri*. Jamia Milli Islamia Historical Research Foundation, Calcutta.

- (2) その他の参考文献

10 ダレーワーン遺跡 Dhalewan

パンジャブ州南部に位置するこの遺跡では、発掘調査の結果、3 時期に及ぶ遺跡編年が設定されている (IAR 1999-2000; Madhu Bala and Vishnu Kant 2000, 2006)。I 期は先文明期および文明期、II 期はクシャーナ朝期、III 期はグプタ朝期以降に相当する。I 期は A～C の 3 時期に細分されており、IA 期が先文明期、IB・IC 期が文明期に相当する。カーリーバンガン遺跡およびバナーワリー遺跡に類似する土器群が先文明期から文明期にかけて出土し、文明期にはハラッパー式土器が加わるとされる。

【発掘調査機関】

Madhu Bala (ASI)

【所在地】

Mansa District

【経度・緯度】

30°02'00"N, 75°33'00"E (Possehl 1999: 753)

【発掘調査年度】

1999 (IAR 1999-2000: 125-127), 2000 (Bala and Vishnu Kant 2006)

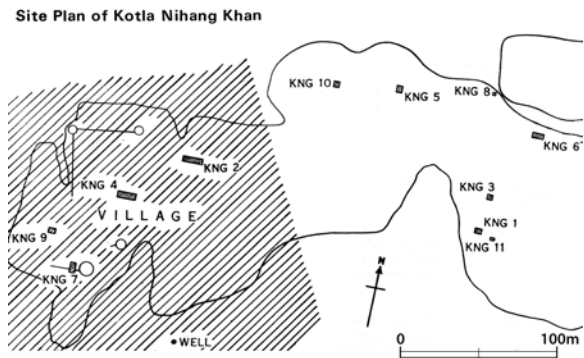
【参考文献】

(1) 発掘報告書

Bala, Madhu and Vishnu Kant (2000) Dhalewan: An Early Harappan site in Punjab. *Purātattva* 30: 42-44.

Bala, Madhu and Vishnu Kant (2006) “Dhalewan: Early-Mature Harappan excavated site in Punjab (India)”, in D.P. Sharma and M. Sharma (eds.) *Early Harappan and Indus-Sarasvati Civilization*. Delhi Kaveri Book. pp. 207-209.

(2) その他の参考文献



コートラー・ニハング・カーン遺跡 平面図
(Sharma 1982 より)

11 カトパーロン遺跡 Katpalon

層厚 5m の文化層をもつこの遺跡では I 期にバーラー式土器と彩文灰色土器の共存が確認されている。II 期はクシャーナ朝併行期、III 期は中世期に相当する。

【発掘調査機関】

Jagat Pati Joshi (ASI)

【所在地】

Jullundur District

【緯度・経度】

31°05'N, 75°52'E (Ghosh 1989: 210)

31°02'00"N, 75°51'00"E (Possehl 1999: 778)

【発掘調査年度】

1976 (IAR 1976-77: 42)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Joshi, J.P. (1993) *Excavations at Bhagwanpura 1975-76 and Other Explorations & Excavations 1975-81 in Haryana, Jammu & Kashmir and Punjab*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.89. Archaeological Survey of India, New Delhi.

(2) その他の参考文献

12 コートラー・ニハング・カーン遺跡

Kotra Nihang Khan

1929年に M.S. Vats によってハラッパー文化の存在が確認され、インダス文明が東方のサトレッジ川流域にまで広がっていたことが明らかにされた遺跡。1955年に再発掘が行われ、3期に及ぶ文化編年が明らかにされた。I期が文明期で、ハラッパー式土器のほか土製・ファイアンス・凍石・貝・準貴石など

の各種装身具、チャート製石刃・おもり、板状土製品 (terracotta cake)、銅製品などが出土している。また、焼成煉瓦積建物や窯跡が検出されている。ここで注目されるのは、少量ながらハラッパー式土器とともにバーラー式土器が出土していることである。外来系のハラッパー式土器と在地系と目されるバーラー式土器の関係はこの地域の文化変遷を考える上で重要である。II期はクシャーナ朝期、III期は中世期である。

【発掘調査機関】

M.S. Vats (ASI) in 1929-30

Y.D. Sharma (ASI) in 1955

【所在地】

Rupnagar District

【緯度・経度】

30°57'N, 76°32'E (Ghosh 1989: 237)

30°56'00"N, 76°34'00"E (Possehl 1999: 785)

【発掘調査年度】

1929 (Vats 1929-30: 131-2), 1955 (Sharma 1982)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Vats, M.S. (1935) Kotla Nihang. *Annual Report of the Archaeological Survey of India 1929-30*: 131-2.

(2) その他の参考文献

Sharma, Y.D. (1982) “Harappan Complex on the Sutlej (India)”, in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

Sharma, Y.D. (1982) The Pre-Harappans in Punjab. *Purātattva* 11: 34-38.

13 マホーラーナー遺跡 Mahorana

ガッガル川流域に所在するこの遺跡では、発掘調査の結果、厚さ 3.10m に及ぶ文化層が確認され、先文明期から文明期もしくはポスト文明期にかけての文化層序が確認されている。最下層ではカーリーバンガン遺跡出土土器に同形の土器群が出土し、上層に向って次第にバーラー式土器が増加するという。このことはバーラー式土器が文明期には出現していた可能性を示している。正式報告書は刊行されていないが、バーラー式土器の成立過程とその年代を考える上で重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

Y.D. Sharma (Punjab Department of Archaeology)

【所在地】

Sangrur District

【緯度・経度】

30°28'N, 75°50'E

30°29'00"N, 75°57'00"E (Possehl 1999: 792)

【発掘調査年度】

1982 (Sharma 1987)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sharma, Y.D. (1987) "Fresh light on the Bara culture from Mahorana", in B.M. Pande and B.D. Chattopadhyay (eds.) *Archaeology and History: Essays in memory of A. Ghosh*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp. 157-176.

(2) その他の参考文献

Bala, M. (1992) *Archaeology of Punjab*. Agam Kala Prakashan, Delhi.

14 ナーガル遺跡 Nagar

3期からなる文化編年が確認されているが、I期はバーラー式土器と彩文灰色土器が伴出する。平面半円形の小屋状建物と祭祀遺構に推定される楕円形焼土遺構2基が検出されている。銅製品、骨製尖頭器、動物土偶などが報告されている。II期はクシャーナ朝併行期、III期は中世期に相当する。

【発掘調査機関】

Jagat Pati Joshi (ASI)

【所在地】

Jullundur District

【緯度・経度】

31°02'00"N, 75°50'00"E (Possehl 1999: 799-800)

【発掘調査年度】

1976 (IAR 1976-77: 42)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Joshi, J.P. (1993) *Excavations at Bhagwanpura 1975-76 and Other Explorations & Excavations 1975-81 in Haryana, Jammu & Kashmir and Punjab*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.89. Archaeological Survey of India, New Delhi.

(2) その他の参考文献

15 ラージャー・シルカップ遺跡 Raja Sirkap

ハラッパー式土器、三角形板状土製品、凍石製玉類が報告されている (IAR 1958-59: 73)。きわめて短い報告しかなく、発掘によるものか踏査によるものか判然としない。

【発掘調査機関】

R.P. Das

【所在地】

Bhatinda District

【緯度・経度】

30°39'N, 74°46'E (Possehl 1999: 812)

【発掘調査年度】

1958 (IAR 1958-59)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

Sharma, Y.D. (1982) "Harappan Complex on the Sutlej (India)", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

16 ローヒラー遺跡 Rohira

厚さ 6m を測る文化層をもつこの遺跡では試掘調査の結果、IA期：先文明期、IB期：文明期、IC期：ポスト文明期（バーラー文化）、II期：初期歴史時代（黒色スリップ土器、前1千年紀前半か）、III期サカ＝クシャーナ朝期、IV期：中世期（ラージプート期）からなる文化層が確認されている。

【発掘調査機関】

G.B. Sharma (Punjab Department of Archaeology)

【所在地】

Sangrur District

【緯度・経度】

30°38'00"N, 75°50'00"E (Possehl 1999: 816)

【発掘調査年度】

1982 (IAR 1982-83: 65-66)

【参考文献】

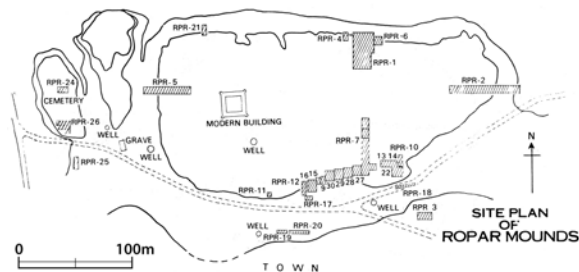
(1) 発掘報告書

Sharma, G.B. and Manmohan Kumar (1981) Excavation at Rohira. *Purātattva* 12:157-158.

(2) その他の参考文献

17 ローパル遺跡 Ropar

遺跡は北・南・西の3つのマウンドから構成され、そのうち北マウンドと西マウンドで発掘調査が行われている。I期はA・B2つの時期に細分され、IA期には先文明期のシースワールB式土器が主体的に出土し、IB期にはハラッパー文化の要素とパーラー式土器が混在する。ハラッパー文化の要素としてはハラッパー式土器のほかに、各種銅製品、凍石製印章、封泥、チャート製おもり、板状土製品、ファイ



ローパル遺跡 平面図

(Sharma 1982)



ローパル遺跡 遠景

(撮影：上杉彰紀 ©上杉彰紀)

アンス製装身具、牛車形土製品などが報告されている。西マウンドでは伸展葬土壙墓が検出されており、ハラッパー式土器やファイアンス・銅製装身具が出土している。パンジャブ地方東部では学史的にも研究の上でもきわめて重要な遺跡であるが、正式報告書は刊行されていない。

【発掘調査機関】

Y.D. Sharma (ASI)

【所在地】

Ambala District

【緯度・経度】

30°58'N, 76°32'E Sharma (1982: 151); Ghosh (1989: 377)

30°58'00"N, 76°32'00"E (Possehl 1999: 816)

【発掘調査年度】

1953 (IAR 1953-54: 6-7), 1954 (IAR 1954-55: 9)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sharma, Y.D. (1955-56) Past Patterns in Living as Unfolded by Excavations at Rupar. *Lalit Kala* 1-2: 121-129.

Sharma, Y.D. (2001) Harappan remains at Ropar. *Purātattva* 31: 39-42.

(2) その他の参考文献

Sharma, Y.D. (1953) Exploration of Historical Sites. *Ancient India* 9: 116-169.

Sharma, Y.D. (1982) "Harappan Complex on the Sutlej (India)", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

Sharma, Y.D. (1982) The Pre-Harappans in Punjab. *Purātattva* 11: 34-38.

18 サンゴール遺跡 Sanghol

面積300㎡、高さ25mに及ぶマウンドをもつこの遺跡では、4ヶ所で発掘調査が行われ、うちSGL-2区において8期からなる文化編年が確認されている。I期が文明期からポスト文明期に相当し、パーラー式土器が主体的に出土する。中層ではH墓地式土器に類似する土器も出土している。このほか、銅器や瑪瑙・ファイアンス・凍石製装身具類、板状土製品などが出土している。遺構では粘土造建物と日干煉瓦積建物が検出されている。II期は彩文灰色土器段階、III・IV期は後期北方黒色磨研土器段階、V期はクシャーナ朝併行期、VI期はグプタ朝併行期、



サンゴール遺跡 遠景

(撮影：上杉彰紀 ©上杉彰紀)

VII 期は中世期、VIII 期はムガル朝併行期に相当する。

【発掘調査機関】

Punjab Department of Archaeology

【所在地】

Ludhiana District

【緯度・経度】

30°45'N, 76°20'E (Sharma 1982: 154)

30°48'N, 76°12'E (Ghosh 1989: 390)

30°47'00"N, 76°24'00"E (Possehl 1999: 813)

【発掘調査年度】

1968 (IAR 1968-69: 25-6), 1969 (IAR 1969-70: 31-32), 1970 (IAR 1970-71: 30-31), 1971 (IAR 1971-72: 39, 41), 1972 (IAR 1972-73: 28), 1977 (IAR 1977-78: 43-44), 1980 (IAR 1980-81: 46), 1984 (IAR 1984-85: 62, 64), 1985 (IAR 1985-86: 67-69), 1986 (IAR 1986-87: 69-71), 1987 (IAR 1987-88: 95-99), 1988 (IAR 1988-89: 69-73), 1989 (IAR 1989-90: 88-94)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Sharma, Y.D. (1982) "Harappan Complex on the Sutlej (India)", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

19 サーラングプル遺跡 Sarangapur

(Sharma 1982) に Suraj Bhan が小規模な発掘調査を実施し、シースワール B 式土器が出土したと記すが、その記述の原典である (Suraj Bhan 1967) を入手することができず、原典に報告された内容を確認することはできなかった。

【発掘調査機関】

Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Rupnagar District

【緯度・経度】

30°46'00"N, 76°48'00"E (Possehl 1999: 819)

【発掘調査年度】

1966 (Suraj Bhan 1967)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Suraj Bhan (1967) *New Light on the Ochre Coloured Ware Culture. Research Bulletin (Arts) Punjab University* 57(3): 1-9.

Sharma, Y.D. (1982) "Harappan Complex on the Sutlej (India)", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.141-165.

20 スネート遺跡 Sunet

発掘調査の結果、I 期: ポスト文明期 (後期ハラッパ文化期)、II 期: 彩文灰色土器文化期、III 期: 黒色スリップ土器・灰色土器文化期、IV 期: シュンガ・クシャーナ朝期、V 期グプタ朝期、VI 期: 中世前期のに及ぶ文化層が確認されている。I 期にはバーラー式土器が出土するという。

【発掘調査機関】

Punjab Department of Archaeology

【所在地】

Ludhiana District

【緯度・経度】

30°50'00"N, 75°50'00"E (Possehl 1999: 826)

【発掘調査年度】

1983 (IAR 1983-84: 67-69)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

ハリヤーナー州

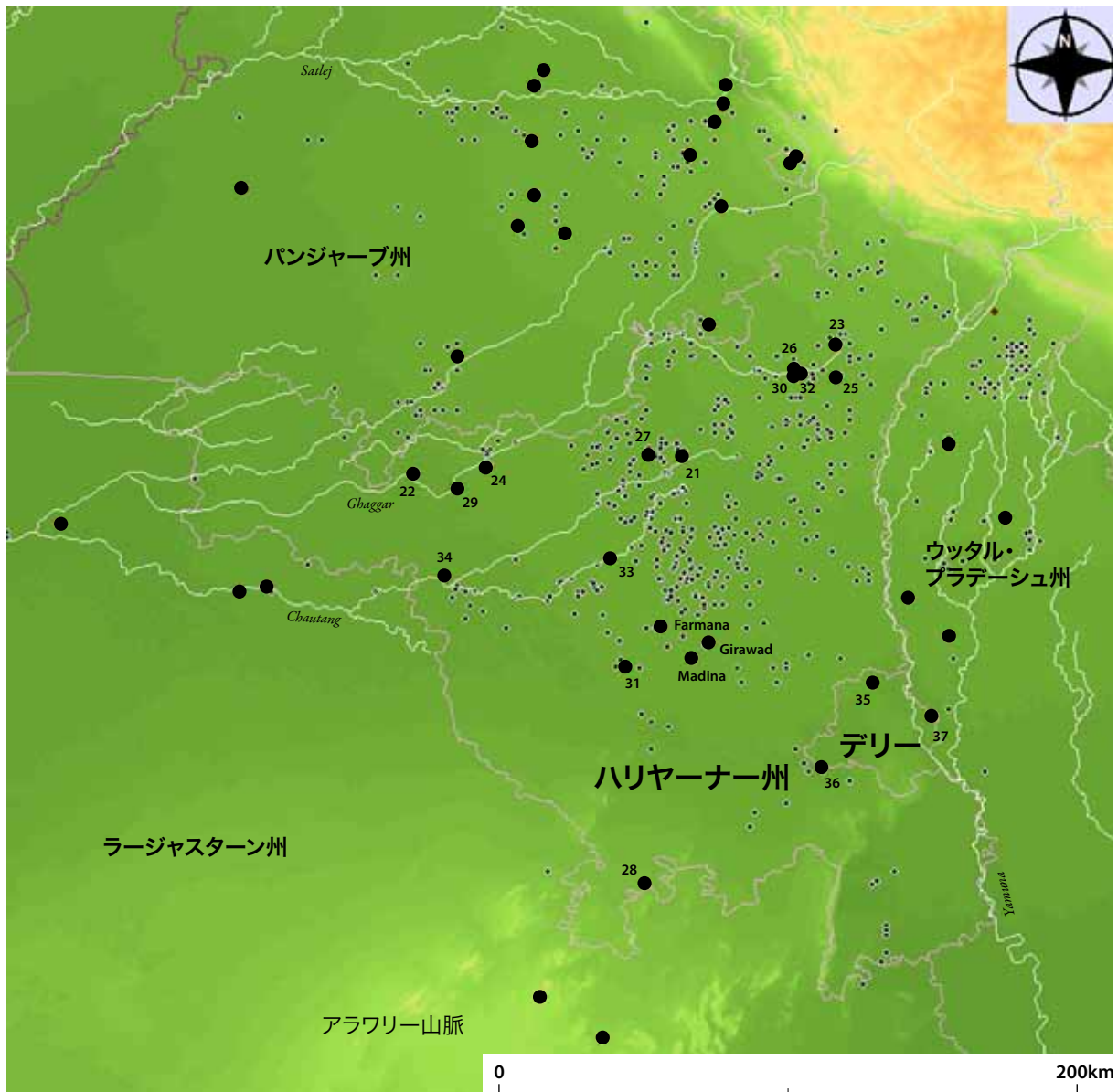
Haryana

14 遺跡の調査が行われているものの、パンジャープ州同様に報告書が刊行された遺跡はきわめて少ない。パンジャープ州からハリヤーナー州、そしてラージャスターン州を流下するガッガル川およびその支流には先文明期以降、多数の遺跡が分布しているが (Manmohan Kumar 2009)、文化変遷の実態が十分に把握されていない現在、この地域の歴史的意義を問うこともままならない。先文明期には西のチョーリスターン地方との関係が示唆される「ハークラー文化」とそれに後続すると考えられるソーティ=シースワール文化が展開し、文明期にはハラッパー文化

の要素が流入する。文明期の最大級の遺跡の一つに数えられるラーキー・ガリー遺跡の文化内容と形成過程が明らかになれば、この地域の文化変遷の実態の理解により近づくことができるであろう。ポスト文明期にはバーラー式土器とミタータル IIB 期式土器が、東の赭色土器と関係しながら分布している。また、埋蔵銅器文化との関係も重要である。前2千年紀後半には彩文灰色土器が出現するが、ポスト文明期の土器様式との関係は依然として重要な研究課題である。

21 バーラー遺跡 Balu

210×180m、高さ 4.5m を測るマウンドでは、A～C 期に分かれる文化層が確認されている。A 期は先



ハリヤーナー州およびデリーにおけるインダス関連遺跡の分布



バルー遺跡

(撮影：V. Dangi © V. Dangi)

インダス文明期、B期はインダス文明期、C期はポスト・インダス文明期（バーラー式土器およびミタール IIB 期式土器に類似）に属する。B・C期には日干煉瓦積建物遺構が検出されている。B期に属するとされる日干煉瓦積周壁の存在は注目される（IAR 1983-84, 1984-85, 1985-86, 1986-87）。ハリヤーナー州域でも重要な遺跡の一つであるが、報告書は刊行されていない。

【発掘調査機関】

U.V. Singh and Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Jind District

【緯度・経度】

29°40'15"N, 76°23'16"E for Balu one (Possehl 1999: 735)

29°41'15"N, 76°23'16"E for Balu two (Possehl 1999: 735)

【発掘調査年度】

1978 (IAR 1978-79: 69), 1979 (IAR 1979-80: 31-2), 1983 (IAR 1983-4: 28-9), 1984 (IAR 1984-85: 20-22), 1985 (IAR 1985-86: 29-30), 1986 (IAR 1986-87: 34), 1992 (IAR 1992-93: 34-36), 1994 (IAR 1994-95: 27-28)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Singh, U.V. and Suraj Bhan (1982) "A note on the excavation at Balu, district Jind (Haryana)", R.K. Sharma (ed.) *Indian Archaeology: New Perspectives*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp. 124-126.

Kesarwani, A. (2001) Balu: A fortified rural settlement in Haryana. *Purātattva* 31: 140-152.

Kesarwani, A. (2002) *Excavation at Balu (Distt. Kaithal - Haryana)*. Kurukshetra University, Kurukshetra.

(2) その他の参考文献

Saraswat, K.S. and A.K. Pokharia (2002) Harappan plant economy at ancient Balu, Haryana. *Prāgdharā* 12: 153-

172.

22 パナーワリー遺跡 Banawali

南北 400m、東西 400m、高さ 10m を測るマウンドを有する。発掘調査によって大別 3 期に及ぶ文化編年が確認されている。I 期は先文明期に相当し、ソーティ式土器あるいはカーリーバンガン遺跡 I 期の土器に類似する黒色帯土器・彩文土器が出土している。焼成煉瓦積建物が検出されている。II 期は文明期に相当し、周壁によって囲まれた都市の様相を帯びる。周壁は厚さ 6m、遺存高 4.50m を測る。周壁内部はさらに南部中央を占める区画とその北側に広がる区画に大別され、前者がいわゆる城塞部で、後者が市街地と考えられている。モヘンジョダロ遺跡やハラッパー遺跡、あるいはカーリーバンガン遺跡に代表される東西分離型の平面配置とは異なる一体型の構成である。市街地に設定された発掘区では日干煉瓦積建物が検出されている。ハラッパー式土器とともに I 期に共通する在地系土器が伴出する。インダス式印章のほか、各種準貴石製の装身具やおもり、動物土偶などが出土している。III 期になると周壁は廃絶し、バーラー式土器が主体となる。パンジャブ地方東部で広範囲に発掘調査が行われた数少ない遺跡の一つで、在地系文化とハラッパー文化の関係を考える上で重要な遺跡であるが、報告書は未刊である。出土したインダス式印章の一部は (Joshi and Parpola 1987) に掲載されている。

【発掘調査機関】

R.S. Bisht (Haryana Department of Archaeology and Museums from 1973-74 to 1976-77 and ASI from 1983-84 to 1987-88)

【所在地】

Hisar District

【緯度・経度】

29°31'N, 75°30'E (Ghosh 1989: 45)

29°36'25"N, 75°23'55"E (Possehl 1999: 735)

29°35'51.2"N, 75°23'34.1"E (GPS)

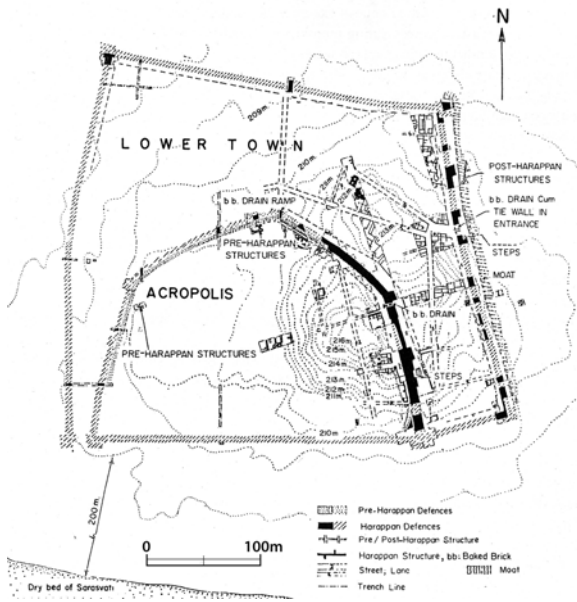
【発掘調査年度】

1973, 1974, 1975, 1976, 1983 (IAR 1983-84: 24-28), 1986 (IAR 1986-87: 32-34), 1987 (IAR 1987-88: 21-27)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Bisht, R.S. (1977) *Banawali: A Look Back into the Pre-Indus*



バナワリー遺跡
(IAR 1987-88 より)



バナワリー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

and *Indus Civilization*. Haryana Government, Chandigarh.

Bisht, R.S. (1982) "Excavations at Banawali, 1974-77", in Gregory L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization*. Oxford & IBH, Delhi. pp. 113-124.

Bisht, R.S. and S. Asthana (1979) "Banawali and Some Other Recently Excavated Harappan Sites in India", in M. Taddei

(ed.) *South Asian Archaeology 1977*. Istituto Universitario Orientale, Naples. pp. 225-240.

(2) その他の参考文献

Bisht, R.S. (1984) "Structural remains and town-planning of Banawali", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization*. Books & Books, Delhi. pp. 89-97.

Bisht, R.S. (1987) "Further excavation at Banawali, 1983-84", in B.M. Pande and B.D. Chattopadhyaya (eds.) *Archaeology and History: Essays in Memory of Sh. A. Ghosh*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp. 135-156.

Bisht, R.S. (1999a) Dholavira and Banawali: Two different paradigms of the Harappan urbis forma. *Purātattva* 29: 14-37.

23 バグワーンプラ遺跡 Bhagawanpura

この遺跡は層厚 2.7m の文化層をもち、IA 期と IB 期に大別される。IA 期はポスト文明期に属し、粘土造基壇が検出されている。土器はバーラー式土器に類似し、彩文土器と刻線文土器を含む。IB 期にはバーラー式土器と彩文灰色土器が伴出する。3 面の遺構面が検出されているが、下位の遺構面では円形もしくは半円形の小屋状建物が、中位の遺構面では 13 室の部屋空間をもつ粘土造建物が、上位の遺構面では焼成煉瓦積建物が検出されている。パンジャブ地方東部における後期ハラッパー文化と彩文灰色土器の共存、すなわちポスト文明期から続く時期の文化期への移行を示す重要な遺跡で、唯一正式報告書が刊行されている。ポスト文明期の土器様相を知る上でも重要である。

【発掘調査機関】

Jagat Pati Joshi (ASI)



バグワーンプラ遺跡

(撮影：V. Dangi ©V. Dangi)

【所在地】

Karnal District

【緯度・経度】

30°04'N, 76°57'E (Ghosh 1989:64)

30°04'00"N, 76°57'00"E (Possehl 1999: 738)

【発掘調査年度】

1975 (IAR 1975-6: 16-17)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Joshi, J.P. (1993) *Excavations at Bhagwanpura 1975-76 and Other Explorations & Excavations 1975-81 in Haryana, Jammu & Kashmir and Punjab*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.89. Archaeological Survey of India, New Delhi.

Joshi, J.P. (1978) Interlocking of Late Harappan Culture and PGW Culture in the Light of Recent Excavations. *Man and Environment* 2: 98-101.

Joshi, J.P. (1978) A Note on the Excavation at Bhagwanpura. *Purātattva* 8: 178-180.

Joshi, J.P. (2004) "Bhagwanpura: A Late Harappan Site in Haryana", in Dilip K. Chakrabarti (ed.) *Indus Civilization Sites in India: New Discoveries*. Marg Publications, Mumbai. pp.44-51.

(2) その他の参考文献

24 ビッラーナー遺跡 Bhirrana

南北 150m、東西 190m を測るマウンドを有するこの遺跡では 3 ヶ年に及ぶ発掘調査が実施され、大別 2 時期、細別 4 期からなる文化編年が提示されている。IA 期はチョーリスターン地方の出土土器 (Mughal 1997) との類似性からハークラー文化期と



ビッラーナー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

呼ばれる。この時期には竪穴式住居と推定される直径約 2 ~ 3.5m の大形土坑が複数検出されている。これらの大形土坑の側面と床面には粘土が張られ、動物骨や土器片が出土する例や銅精錬に用いられたと考えられる坩堝が出土した例がある。柱穴は確認されていないが、土坑内から葦圧痕のある粘土塊が出土しており、木組藁葺による上部構造が推定されている。IB 期になると日干煉瓦積建物が出現し、カーリーバンガン遺跡 I 期に類似する土器群が出土する。同心円文を刻んだ花卉形印章が 1 点報告されている。IIA 期は「盛期ハラッパー文化前半期 (Early Mature Harappan)」とされ、集落は日干煉瓦積の周壁によって全体を囲まれ、その内部はさらに城塞部と市街地へと区画される。IIB 期は「盛期ハラッパー文化期 (Mature Harappan)」と呼ばれ、IIA 期とは若干異なる主軸方向に従って周壁が築かれる。この時期においても日干煉瓦が主体的で、周壁の内部では街路と組み合わせた煉瓦積建物群が検出されている。さまざまな遺物が出土しているが、中でも 10 点のインダス式印章が目される。

マウンド全体に発掘区が設定され、広範囲に及ぶ発掘調査が行われた遺跡であり、各時期の遺構・遺物とともにその変遷過程はパンジャーブ平原東部の文化変遷を考える上で多くの情報を提供することになる。

【発掘調査機関】

L.S. Rao (ASI)

【所在地】

Fatehabad District

【緯度・経度】

29°33'N, 75°33'E (Lao 2004: 20)

29°33'01.3"N, 75°32'57.2"E (GPS)

【発掘調査年度】

2003 (Rao *et al.* 2004), 2004 (Rao *et al.* 2005), 2005 (Rao *et al.* 2006)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Rao, L.S., Nandini B. Sahu, Prabhaskar Sahu, U.A. Shastri and Samir Diwan (2004) Unearthing Harappan settlement at Bhirrana (2003-04). *Purātattva* 34: 20-24.

Rao, L.S., Nandini B. Sahu, Samir Diwan, Prabhaskar Sahu and U.A. Shastri (2005) New light on the Excavation of Harappan settlement at Bhirrana. *Purātattva* 35: 60-68.

Rao, L.S., Nandini B. Sahu, U.A. Shastri, Prabhaskar Sahu and Samir Diwan (2006) Bhirrana Excavation: 2005-06.

Purātattva 36: 45-49.

(2) その他の参考文献

Rao, L.S. (2005) Stylised terracotta animal head with horns from Bhirrana: identification and Significance. *Purātattva* 35: 69-75.

Rao, L.S. (2006a) The Harappan spoked wheels rattled down the streets of Bhirrana, District Fatehabad, Haryana. *Purātattva* 36: 59-67.

Rao, L.S. (2006b) Settlement pattern of the predecessors of the Early Harappan at Bhirrana, District Fatehabad, Haryana. *Man and Environment* 31(2): 33-42.

25 ダウラトプル遺跡 Daulatpur

層厚 6m の文化層は 3 期に大別される。I 期はポスト文明期に相当し、掘っ立て柱式建物の存在を示す柱穴群、日干・焼成煉瓦積建物、円形・楕円形焼土遺構などが検出されている。焼土遺構からは土器片と動物骨が出土している。土器は先ハラッパー文化系統の在地系土器、ハラッパー系土器、H 墓地系土器が出土しており、一般的にバーラー式土器との関係を示す。彩文土器のほか刻線文土器を含む。このほか銅器、骨器、各種装身具、板状土製品が出土している。II 期は彩文灰色土器段階、III 期は初期歴史時代に相当する。

【発掘調査機関】

U.V. Singh and Suraj Bhan (Kurukshetra University) in 1968-69

U.V. Singh in 1976-78

【所在地】

Karnal District

【緯度・経度】

29°57'N, 76°56'E (Ghosh 1989: 117)

29°57'00"N, 76°57'00"E (Possehl 1999: 805)

【発掘調査年度】

1968-69 (IAR 1968-69: 8-9), 1976-77 (IAR 1976-77: 19), 1977-78 (IAR 1977-78: 23)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

26 ジョーグナーケーラー遺跡 Jognakhera

発掘調査の結果、2 期からなる文化編年が設定されている (Acharya and Dahiya no date; Malik *et al.* 2007)。I 期はポスト文明期 (バーラー文化期)、II 期は彩文灰色土器文化期である。I 期に関しては土器焼成窯が、II 期には集落を囲繞すると推定される壕が検出されている。

【発掘調査機関】

M. Acharya, D.S. Malik, R.S. Dahiya (Department of Archaeology and Museum, Haryana)

【所在地】

Kurukshetra District

【緯度・経度】

29°59' N, 76°48' E (Malik *et al.* 2007: 85)

【発掘調査年度】

2003

【参考文献】

- (1) 発掘報告書

Acharya, M. and R.S. Dahiya (no date) *Jognakhera, Kurukshetra (Excavations under Sarasvati Heritage Project)*. Director, Archaeology and Museum, Haryana, Panchkula.

D.S. Malik, M. Acharya and R.S. Dahiya (2007) "A Brief Note on the Excavation at Jognakhera (Kurukshetra)", in S.P. Shukla, R.S. Bisht, M.P. Joshi and Prashant Srivastava (eds.) *History and Heritage (In Honour of Prof. Kiran Kumar Thaplyal)*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp.85-90.

- (2) その他の参考文献

27 カーラーヤト遺跡 Kalayat

発掘調査の報告である (Phogat 1970) を入手する



ジョーグナーケーラー遺跡

(撮影 : V. Dangi © V. Dangi)

ことができなかつたため不明な点が多いが、1966年度に遺跡が発見された際には先文明期および文明期の土器のほか、彩文灰色土器、北方黒色磨研土器が採集されている (IAR 1966-67)。

【発掘調査機関】

Silak Ram Phogat (Kurukshetra University)

【所在地】

Jind District

【緯度・経度】

【発掘調査年度】

1969 (Phogat 1970: 137-40)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Phogat, S.R. (1970) Archaeological remains at Kalayat.

Kurukshetra University Research Journal (Arts and Humanity) 4: 137-140.

(2) その他の参考文献

28 カトローリ遺跡 Khatoli

35×35mの小規模な遺跡で、試掘調査の結果、ポスト文明期の遺跡であることが確認されている (Sharma 1982)。赤色土器および灰色土器からなるポスト文明期 (出土土器の実測図によれば、ミタータル IIB 期の土器およびバーラー式土器の要素が認められる) に加えて、白色彩文黒縁赤色土器が出土しているとのことで、ラージャスターン地方からの影響関係が示唆されている。

【発掘調査機関】

R.P. Sharma (ASI)

【所在地】

Mahendragar

【緯度・経度】

28°05'00"N, 76°15'00"E (Sharma 1982)

【発掘調査年度】

1978 (Sharma 1982)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sharma, R.P. (1982) Khatoli: A protohistoric site in Haryana.

Purātattva 11: 178-180.

(2) その他の参考文献

29 クナール遺跡 Kunal

1.2ha 前後の小規模な遺跡であるが、発掘調査の結果パンジャブ地方東部の先文明期の様相を理解する上で重要な情報が得られている (Khatri and Acharya 1995; Acharya 2008)。先文明期に属する I 期は a ~ c 期に細分されている。Ia 期はパキスタンのチョーリスターン地方の土器との類似性をもとにハークラー式土器と命名された土器群を特徴とする。胴部上半から口縁部にかけて広く暗茶褐色系の顔料で塗りつぶした土器、櫛状工具による波状平行沈線文を施す土器、単純な幾何学文や動植物文を単色顔料で描く土器などがある。遺構の点では直径 2m 前後、深さ 1m 前後の竪穴住居と推定される大形土坑を特徴とする。Ib 期にも竪穴住居状の遺構が存続するが、壁面に日干煉瓦を積むなどの変化がみられる。土器においては、黒色と白色の顔料を併用した二色彩文土器が主体となり、獣角文やピーパール文など先文明期終末期を特徴づける要素が出現する。また、カーリーバンガン遺跡 I 期との共通性も明瞭となることが指摘されている。Ic 期は先文明期から文明期への移行期とされ、日干煉瓦を用いた平面方形・矩形の建物へと変化する。一括で出土した金・銀製装身具や幾何学文を刻んだ凍石製印章などが注目される。

インド領内に広がるパンジャブ地方東部での調査は、古くはカーリーバンガン遺跡やバナーワリー遺跡にさかのぼるが、クナール遺跡の調査以降、この地域における先文明期から文明期にかけての発掘調査が活発となった。特に、21 世紀に入ってからインド政府考古局によって実施されたサラスヴァティー文化遺産プロジェクト (Sarasvati Heritage Project) によって、サラスヴァティー川に比定され



クナール遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

るガッガル川流域の多くの遺跡の調査が進められ、クナル遺跡の調査成果を傍証する成果が得られている。

【発掘調査機関】

J.S. Khatri (Department of Archaeology and Museums, Government of Haryana)

【所在地】

Hisar District

【緯度・経度】

29°30'N, 75°41'E (Khatri and Acharya 1995: 84)

29°37'35"N, 75°39'30"E (Possehl 1999: 786)

29°37'15.6"N, 75°39'30.5"E (GPS)

【発掘調査年度】

1985 (IAR 1985-86: 23-25), 1991 (IAR 1991-92: 37-39), 1993 (IAR 1993-94: 47-51), 1994 (IAR 1994-95: 26-27), 1995 (IAR 1995-96: 24), 1998 (IAR 1998-99: 11-12)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Khatri, J.S. and M. Acharya (1995) Kunal: A new Indus-Saraswati site. *Purātattva* 25: 84-85

(2) その他の参考文献

Sharma, Shubh Kiran (1995) Scientific studies of Kunal site, District Hissar, Haryana. *Purātattva* 25: 86-87.

Gupta, S.P. (1996) *The Indus-Saraswati Civilization: Origins, Problems and Issues*. Pratibha Prakashan, Delhi.

30 ミルザープル遺跡 Mirzapur

この遺跡ではポスト文明期と初期歴史時代、そしてムガル朝併行期の遺構・遺物が確認されている。ポスト文明期の文化層は厚さ 1.0～1.5m を測り、3面の遺構面を伴う日干煉瓦積建物が検出されている。出土土器はバーラー式土器に属し、ほかに石器、各種準貴石製玉類、板状土製品、動物土偶などが報告されている。

【発掘調査機関】

U.V. Singh and Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Kurukshetra District

【緯度・経度】

29°58'N, 76°49'E (Ghosh 1989: 289)

29°58'00"N, 76°48'00"E (Possehl 1999: 797)

【発掘調査年度】

1975 (IAR 1975-76: 18)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Singh, U.V. (1977) "Late Harappan culture as revealed by the excavations at Mirzapur and Daulatpur" District Kurukshetra (Haryana)", in B.B. Lal and S.C. Malik (eds.) *Indus Civilization: Problems and issues*. Indian Institute of Advanced Study, Shimla. pp. 1-7.

(2) その他の参考文献

31 ミタータル遺跡 Mitathal

この遺跡の発見はグプタ朝金貨が発見された1915-16年にさかのぼり、1965年には埋蔵銅器文化に属する銅製銛が2点、次いで13点の銅製指輪の一括資料がみついている。東西2つのマウンドからなり、第1号マウンド(東マウンド)は150×130m、高さ5m、第2号マウンド(西マウンド)は300×175m、高さ3mを測る。両マウンドでそれぞれ1ヶ所ずつの発掘区が設けられている。発掘調査の結果、2期に大別される文化編年が明らかにされ、そのうちII期はさらにA・B期に細別されている。I期はシスワール式土器が主体で、カーリーバンガン遺跡I期との関連性を示す。粘土塊および日干煉瓦を用いた遺構が検出されている。IIA期はハラッパー式土器が主体となり、それにシスワール式土器が伴う。日干煉瓦積建物が検出されている。多量のファイアンス製腕輪が出土している。IIB期になると、典型的なハラッパー式土器はみられなくなり、ハラッパー式土器とシスワール式土器が融合したとされる土器様式へと変化する。日干煉瓦積建物が検出されているが、IIA期に比較すると粗雑なつくりとなる。この遺跡は先文明期からポスト文明期にか



ミタータル遺跡南丘

(撮影: 上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

けての文化変遷を把握する上で重要な遺跡である。また、より東方に分布する埋蔵銅器文化の銅器の出土も、ポスト文明期における文化様相を考える上で重要な資料となっている。

【発掘調査機関】

Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Bhiwani District

【緯度・経度】

28°50'N, 76°10'E (Ghosh 1989: 289)

28°53'10"N, 76°10'20"E (Possehl 1999: 797)

28°53'27.8"N, 76°10'11.4"E

【発掘調査年度】

1968 (Bhan 1975)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Suraj Bhan (1975) *Excavation at Mitathal (1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide*. Kurukshetra University, Kurukshetra.

(2) その他の参考文献

Suraj Bhan (1973) "The Sequence and Spread of Prehistoric Cultures in the Upper Sarasvati Basin". in D.P. Agrawal and A. Ghosh (eds.) *Radiocarbon and Indian Archaeology*. Tata Institute of Fundamental Research, Bombay. pp.252-263.

32 ラージャ・カルナ・カー・キラー1・2 遺跡

Raja Karna Ka Qila

この遺跡では当初、初期歴史時代（北方黒色磨研土器文化期）遺構の文化層序が確認されていたが、1974年度の調査で1～1.5mの文明期終末頃の文化層が確認された。多孔土器の土器のほか、日干煉瓦積建物も検出されている。そのほか、各種準貴石製およびファイアンス製装身具、ファイアンス製動物像なども出土している。詳細な報告はない。

【発掘調査機関】

U.V. Singh and Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Karnal District

【緯度・経度】

29°58'00"N, 76°49'00"E for Raja Karna Ka Qila one (Possehl 1999: 812)

29°58'10"N, 76°49'10"E for Raja Karna Ka Qila two (Possehl

1999: 812)

【発掘調査年度】

1970 (IAR 1970-71: 15-16), 1971 (IAR 1971-72: 23-24), 1972 (IAR 1972-73: 12-13), 1974 (IAR 1974-75: 16), 1975 (IAR 1975-76: 18)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

33 ラーキー・ガリー遺跡 Rakhi Garhi

7つのマウンド (RGR-1～7) を有し、総面積100ha前後に及ぶと推定される遺跡で、インド領内では最大ともいわれる遺跡である。最も大きなマウンドであるRGR-4・5区が現在の村によって覆われているが、RGR-1・2・6区を中心にRGR-4・5・7区でも一部で発掘調査が行われている (Nath 1998, 1999, 2001)。その結果、初期ハラッパー文化期 (先文明期=I期) と盛期ハラッパー文化期 (文明期=II期) の文化層が確認されている。I期の文化層はRGR-1・6区を中心に確認されており、a・b2時期に細分されている。Ia期には日干煉瓦積の円形建物と矩形建物が検出されており、Ib期になると、矩形建物を街路と組み合わせた計画的配置がみられるようになる。I期の土器はカーリーバンガン遺跡I期の土器とハークラー式土器の要素を示すとされる。II期の文化層はRGR-1・2区を中心に検出されている。RGR-2区はこの時期に日干煉瓦積壁体の表面に焼成煉瓦積擁壁を張った周壁によって囲まれる。その内部では平面矩形の日干煉瓦・焼成煉瓦積建物群や排水施設、土器焼成窯、準貴石製玉類・骨製品製作址、儀礼用と推定される遺構群などが検出されている。

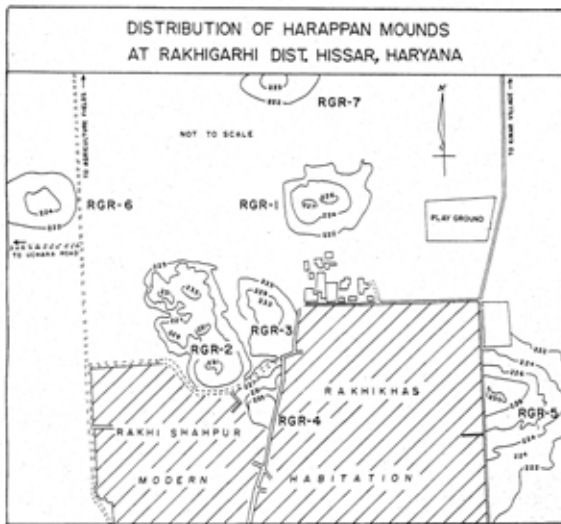
残念ながらこの遺跡には現在の村が存在し、遺跡の破壊や盗掘が進んでいるが、その平面的な規模のみならず厚い文化層からみても、パンジャブ地方東部の中心的遺跡であることは疑い得ない。発掘調査の成果もまたその重要性を物語っているが、現在のところ短文の概報が公表されているのみで、出土した遺構・遺物の内容も判然としないところが多い。

【発掘調査機関】

Amarendra Nath (the Institute of Archaeology of the Survey)

【所在地】

Hisar District



ラーキー・ガリ遺跡平面図
(Nath 2001 より)



ラーキー・ガリ遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

【緯度・経度】

29°16'N, 76°10'E (Ghosh 1989:366; IAR 1999-2000: 30; Nath 1998: 39)

29°17'30"N, 76°06'50"E (Possehl 1999: 813)

29°17'29.5"N, 76°06'48.2"E (GPS)

【発掘調査年度】

1997 (IAR 1997-98: 55-63), 1998 (IAR 1998-99: 13-23), 1999 (IAR 1999-2000: 30-33)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Nath, Amarendra (1998) Rakhigarhi: A Harappan metropolis in the Sarasvati-Drishadvati divide. *Purātattva* 28: 39-45.

Nath, Amarendra (1999) Further excavations at Rakhigarhi. *Purātattva* 29: 46-49.

Nath, Amarendra (2001) Rakhigarhi: 1999-2000. *Purātattva* 31: 43-46.

(2) その他の参考文献

34 シースワール遺跡 Siswal

面積約 300×200m、高さ 2.5m を測るこの遺跡では 2×2m の試掘トレンチによる調査が行われている。A・B2 期からなる文化編年が提示されている。A 期の土器はカーリーバンガン遺跡 I 期との共通性が指摘されており、彩文には黒色顔料に加えて白色顔料も使用される。B 期には原則的に A 期の土器様式の延長線上に位置づけられるが、白色彩文がみられなくなることで、器壁の厚手化、細部形態の変化、そしてハラッパー式土器の共伴などの違いがみられる。A 期が先文明期、B 期が文明期に位置づけられ、シースワール式土器は在地の土器伝統として評価することができよう。同じく先文明期からポスト文明期まで続くと思われるバーラー式土器との関係が問題である。

【発掘調査機関】

Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Hisar District

【緯度・経度】

29°10'N, 75°03'E (Ghosh 1989: 414)

29°13'12"N, 75°30'30"E (Possehl 1999: 824)

29°13'16.9"N, 75°30'23.3"E (GPS)

【発掘調査年度】

1970 (Bhan 1975)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Suraj Bhan (1971-72) Siswal - a pre-Harappan site in Drisadvati valley. *Purātattva* 5: 44-46.

(2) その他の参考文献

Suraj Bhan (1973) "The Sequence and Spread of Prehistoric Cultures in the Upper Sarasvati Basin", in D.P. Agrawal and Ghosh (eds.) *Radiocarbon and Indian Archaeology*.



シースワール遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

Tata Institute of Fundamental Research, Bombay. pp.252-263.

Shaffer, J.G. (1986) "Cultural Development in the Eastern Punjab", in J. Jacobson (ed.) *Studies in the Archaeology of India and Pakistan*. Oxford & IBH Publishing Co., Delhi. pp. 195-235.

デリー Delhi

デリー周辺では、ポスト文明期を中心とする遺跡がわずかながらも確認されている。北西のガッガル平原から東のガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地域、そして南のアラワリー山脈へと移行する地域に相当しており、ハリヤーナー州南部およびウッタール・プラデーシュ州西部を含めて異なる地域文化の交流の舞台として注目される。

35 ボールガル遺跡 Bhorgarh

デリー北郊 30km のところにあるこの遺跡では、発掘調査の結果、I期：ポスト文明期(後期ハラッパー文化)、II期：彩文灰色土器文化期、III期：クシャーナ朝期、IV期：中世という文化編年が確認されている (IAR 1993-94; Babu 1995)。I期に関しては、居住域は確認されなかったが、2基の墓が検出されており、うち1基は伸展葬で頭部側に土器3個が置かれていたとされる。サナウリー遺跡同様にポスト文明期の葬送行為を知る上で重要である。

【発掘調査機関】

B.S.R. Babu (Department of Archaeology, Government of

Delhi)

【所在地】

Delhi

【緯度・経度】

28°49'45"N, 77°05'15"E (Mani 1997: 17)

28°05'00"N, 77°05'00"E (Possehl 1999: 740)

【発掘調査年度】

1993 (IAR 1993-94: 11, 13)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Babu, B.S.R. (1995) Excavations at Bhorgarh. *Purātattva* 25: 88-90.

Madhu Bala (1977) Bhorgarh, Delhi: A Painted Grey Ware Site. *Journal of the Oriental Institute* 27(1-2): 43-50.

(2) その他の参考文献

Mani, B.R. (1997) *Delhi: Threshold of the Orient*. Aryan Books International, New Delhi. pp. 17-21.

36 ダーンサー遺跡 Dhansa

文明期からポスト文明期にかけての遺跡と推定されるが、(Suraj Bhan and Shaffer 1978) の註にごく簡単に発掘成果が紹介されているのみであり、詳細は不明である。

【発掘調査機関】

Suraj Bhan (Kurukshetra University)

【所在地】

Delhi

【緯度・経度】

28°31'00"N, 76°56'00"E (Possehl 1999: 753)

【発掘調査年度】

1975-6 (Suraj Bhan and Shaffer 1978: 67)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

Suraj Bhan and J.G. Shaffer (1978) New Discoveries in Northern Haryana. *Man and Environment* 2: 59-68.

37 マンドーリ遺跡 Mandoli

デリーの中心部から西に 16km のところに所在するこの遺跡はヤムナー川右岸に位置する。発掘調査の結果、I期：ポスト文明期 (後期ハラッパー文化)、

II期：彩文灰色土器文化期、III期：黒色スリッブ土器文化期、IV期：シュンガ＝クシャーナ朝期、V期：グプタ朝期からなる文化編年が設定されている。

【発掘調査機関】

B.S.R. Babu (Department of Archaeology, Government of Delhi)

【所在地】

Delhi

【緯度・経度】

28°42'10"N, 77°18'30"E (Mani 1997: 21)

28°05'00"N, 77°05'00"E (Posschl 1999: 740)

【発掘調査年度】

1987, 1988 (Babu 1996)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

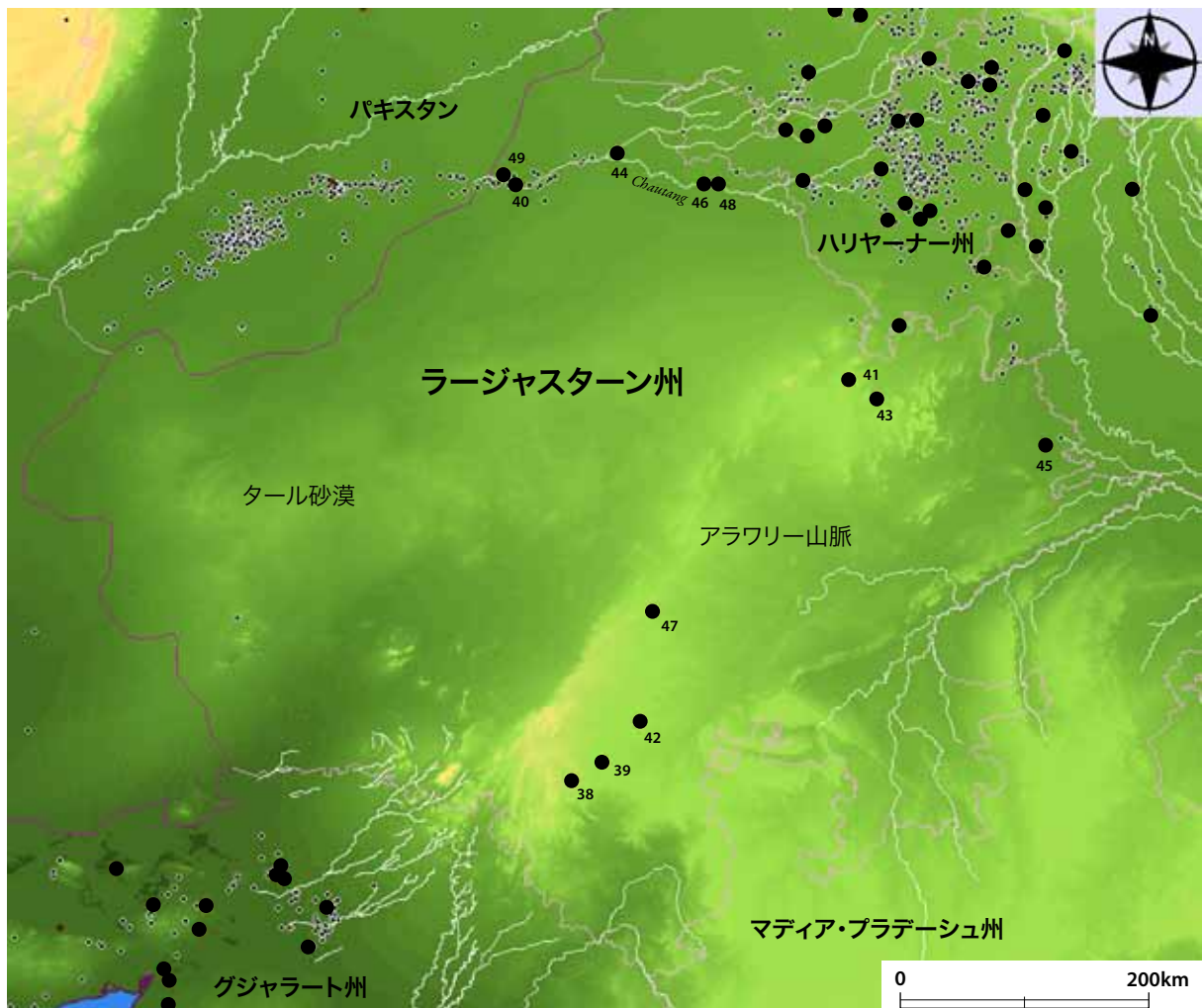
Babu, B.S.R. (1996) "Mandoli - A Late Harappan Settlement in Delhi". in C. Margabandhu and K.S. Ramachandran (ed.) *Spectrum of Indian Culture*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp.98-104.

(2) その他の参考文献

Mani, B.R. (1997) *Delhi - Threshold of the Orient* -. Aryan Books International, New Delhi. pp. 21-25.

ラージャスタン州
Rajasthan

ラージャスタン州は北部のガッガル川流域、中央部のアラワリー山脈、西部のタール砂漠と多様な自然環境および地形的特徴を有する地域である。それぞれの地域で展開した文化もまた多様で、先文明期においては北部のガッガル川流域ではソーティ＝シースワール文化が、南半部のアラワリー山脈ではアーハール＝バナース文化が展開した。文明期にはガッガル平原においてハラッパー文化の進出が顕著に認められるが、バーラータル遺跡やギルンド遺跡の出土資料に示されるようにアーハール＝バナース



ラージャスタン州におけるインダス関連遺跡の分布

文化も文明期において西方と交流関係を有していたことが明らかにされつつある。また、アーハール＝バナース文化は南のグジャラート地方とも交流関係を有している。さらに、アラワリー山脈北部に位置するケートリー地方では、文明期に豊富な銅資源の開発と関係すると推定されるガネーシュワル文化が存在している。資源流通を軸にこれらの地域文化間の関係を明らかにし、インダス文明社会における位置づけを解明することが課題である。

38 アーハール遺跡 Ahar

ウダイプル市内に位置するこの遺跡では、1961年度に H.D. Sankalia 率いるデカン・カレッジ調査隊によって発掘が行われている。発掘調査の結果、I期：金石併用文化期、II期：初期歴史時代という文化編年が確認されている。I期は a～c 期に細分されるが、いずれの時期も白色彩文黒縁赤色土器を特徴とする。また、コメの遺存体も確認されている。

ギルンド遺跡とともに、ラージャスターン地方南部に展開したバナース文化の代表的な遺跡であるが、その後に発掘されたバーラータル遺跡の成果も踏まえて、前4千年紀以降、黒縁赤色土器を特徴とする文化が一貫してこの地域に展開していたこと、前3千年紀後半にインダス文明社会と接点をもったこと、さらにこの時期には中央アジア方面とも交渉があったことなどが確認されるにいたっている。

白色彩文黒縁赤色土器は文明期のグジャラート地方にも広く分布しており、文明期からポスト文明期にかけてバナース文化が文化展開の上で大きな役割を果たしたことが明らかになっている。

【発掘調査機関】

A.K. Vyas (Rajasthan State Department of Archaeology) in



アーハール遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©上杉彰紀)

1950

R.C. Agrawala (Rajasthan State Department of Archaeology) in 1954-56

H.D. Sankaria (Deccan College) in 1961-2

【所在地】

Udaipur District

【緯度・経度】

27°42'N, 75°38'E (Ghosh 1989: 5)

28°25'00"N, 78°15'00"E (Possehl 1999: 727)

24°35'13.8"N, 73°43'17.6"E (GPS)

【発掘調査年度】

1950, 1952, 1954, 1955 (IAR 1955-56: 11), 1961 (IAR 1961-62: 45-50)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sankalia, H.D., S.B. Deo and Z.D. Ansari (1969) *Excavations at Ahar (Tambavati) -1962*. Deccan College, Poona.

(2) その他の参考文献

39 バーラータル遺跡 Balathal

本来2ヘクタール前後の遺跡であったと推定されるが、耕作によって半分以上が破壊されてしまったという (Misra 1997: 252)。文化層は7mに及ぶ。1994～1996年度の調査で、バナース文化期および初期歴史時代の文化層序が確認されている。

建築遺構は石・日干煉瓦・粘土で構築されており、4期からなる建物群が検出されている。また、その北側に粘土積・石張りの周壁によって囲まれる空間が検出されている。壁体の厚さは4.80～5.0mと厚く、囲まれる空間の面積は500m²に及ぶ。その機能に関しては、外敵からの攻撃時の避難施設と集



バーラータル遺跡

(撮影：小磯 学 ©インダス・プロジェクト)

落有力者の居宅という2つの可能性が指摘されている (Misra 1997)。

年代としてはC-14年代測定値が得られており、金石併用文化は前2600年以前にさかのぼる可能性が示唆されている (Misra 1997)。黒縁赤色土器を特徴とするバナース文化 (もしくはアーハール文化) がインダス文明併行期以前からラージャスターン地方南部の文化として展開していたことを示す重要な遺跡といえよう重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

V.N. Misra and Vasant Shinde (Deccan College)

【所在地】

Udaipur District

【緯度・経度】

24°43'N, 73°59'E (Misra 1997)

24°43'33.3"N, 73°59'03.7"E (GPS)

【発掘調査年度】

1993 (IAR 1993-94: 93-97), 1995 (IAR 1995-96: 64-70), 1996 (IAR 1996-97: 90-100), 1997 (IAR 1997-98: 145-153), 1998 (IAR 1998-99: 142-149), 1999 (IAR 1999-2000: 137-147)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Misra, V.N. (1997) Balathal - A Chalcolithic settlement in Mewar, Rajasthan, India: Results of first three seasons excavations. *South Asian Studies* 13: 251-273.

Misra, V.N., V.S. Shinde, R.K. Mohanty, K. Dalal, A. Mishra, L. Pandey and J.S. Kharakwal (1995) Excavations in Balathal: Their contribution to the Chalcolithic and Iron Age culture of Mewar, Rajasthan. *Man and Environment* 20(1): 57-80.

Misra, V.N., V.S. Shinde, R.K. Mohanty, L. Pandey and J.S. Kharakwal (1997) Excavations at Balathal, District Udaipur, Rajasthan (1995-97) with special reference to Chalcolithic architecture. *Man and Environment* 22(2): 35-59.

(2) その他の参考文献

Misra, V.N. (2005) Radiocarbon chronology of Balathal, District Udaipur, Rajasthan. *Man and Environment* 30(1): 54-60.

Robbins, Gwen, Veena Mushrif, V.N. Misra, R.K. Mohanty and V.S. Shinde (2006) Biographies of the skeleton: Pathological conditions at Balathal. *Man and Environment* 31(2): 50-65.

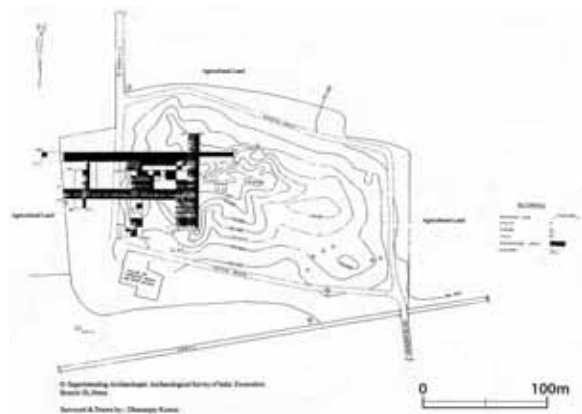
Shinde, V. (2000) The Origin and Development of the

Chalcolithic in Central India. *Indo-Pacific Prehistory Association Bulletin* 19: 125-136.

Thomas, P.K. and P.P. Joglekar (1996) Faunal remains from Balathal, Rajasthan: a preliminary analysis. *Man and Environment* 21(1): 91-97.

40 バロール遺跡 Baror

パキスタンとの国境付近のアヌープガルから13kmのところにあるこの遺跡には、東西200m、南北150mを測るマウンドが残る。周辺との比高差は11mである。カーリーバンガン遺跡との距離は約100kmを測る。1951年にA. Ghoshによる踏査で発見された遺跡で、2003年度から3ヶ年にわたって発掘調査が実施され、3期に及ぶ文化編年が提示されている。I期は先文明期、II期は初期ハラッパー文化期 (先文明期)、III期は文明期に属する。I期はマウンドの西方の平坦面で設定されたトレンチの下層部分で確認されており、壺・甕類を主体とする



バロール遺跡 平面図
(Sant et al. 2005)



バロール遺跡

(撮影: 上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

無文土器が出土している。II期の層から出土する二色彩文土器とは明確に異なっていることから、I期として弁別されている。II期はカーリーバンガン遺跡I期に併行する段階として位置づけられ、黒色彩文に白色充填を組み合わせた文様を描く。幾何学文が主体であるが、一部に植物文や動物文も報告されている。II期には煉瓦積壁体の断片が検出されているものの、I期同様に柱穴に推定される土坑が多数検出されており、調査者は木造の小屋状建物が主体であったと推測している。また40mの長さに及んで水路が検出されているという。文明期に相当するIII期には日干煉瓦積建物群が街路とともに検出されている。また、マウンドの北側のトレンチでは周壁の一部に推定される盛土と日干煉瓦積壁体を組み合わせた遺構が検出されている。また、II期からは幾何学文を刻んだ凍石製印章が、III期からはII期のものと同型の幾何学文印章とインダス式印章が報告されている。

正式報告書は刊行されていないが、パンジャブ地方の東部と西部、またパンジャブ地方とチョーリスターン地方との間にある遺跡で、各地域間の関係を知る上で重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

ASI (Urmila Sant)

【所在地】

Ganganagar District

【緯度・経度】

29°10'N, 73°19'E (Sant *et al.* 2005: 50)

29°10'08.1"N, 73°18'48.3"E (GPS)

【発掘調査年度】

2003, 2004, 2005 (Sant *et al.* 2005)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sant, Urmila, T.J. Baidya, N.G. Nikoshey, N.K. Sinha, S. Nayan, J.K. Tiwari and A. Arif (2005) Baror: A new Harappan site in Ghaggar valley: A preliminary report. *Purātattva* 35: 50-59.

(2) その他の参考文献

41 ガネーシュワル遺跡 Ganeshwar

銅鉱石の産出地ケートリーの近郊に位置するこの遺跡では、3.65mに及ぶ包含層に3面の遺構面が検出されている。当初は包含層を通して、銅器、幾

何形細石器、土器が出土すると報告されたが (IAR 1981-82)、のちに細石器文化期に相当するI期、ガネーシュワル・ジョードプラ文化期に属するII・III期に細分された^註 (IAR 1987-88)。銅器には鏃、槍先、釣針、鑿、指輪、ヘアピン、腕輪などが報告されている。注目される資料として螺旋形を並列させた頭部をもつピンが出土している (IAR 1983-84)。III期には土器を除く出土遺物の99%を銅器が占めるといふ (IAR 1987-88)。細石器はクォーツ、チャート、玉髄、ガーネット、ジャスパーを素材とし、石刃、三日月形石器、三角形石器、台形石器などが含まれる。石核・剥片類も出土している。土器は赭色土器 (Ochre-Coloured Pottery) に類似するとされる。また、ソーティ式土器との類似性も指摘されている (IAR 1983-84)。ガネーシュワルと類似する出土遺物が得られたジョードプラ遺跡でC-14年代測定値が得られており、較正值かどうか判然としないものの、I期は前3800年前後、II期は前2800年前後、III期は前2000年前後の年代が提示されている (IAR 1987-88)。

註：ただし、翌年1988-89年の調査ではIII期は鉄器時代とされている。

【発掘調査機関】

Vijay Kumar (Rajasthan Department of Archaeology)

【所在地】

Sikar District

【緯度・経度】

27°40'N, 75°51'30"E (IAR 1981-82)

27°40'25.3"N, 75°48'58.3"E (GPS)

【発掘調査年度】

1981 (IAR 1981-82: 61-62), 1983 (IAR 1983-84: 71-72), 1987 (IAR 1987-88: 101-102), 1988 (IAR 1988-89: 76-78)

【参考文献】



ガネーシュワル遺跡

(撮影：遠藤 仁 ©インダス・プロジェクト)

(1) 発掘報告書

Agrawala, R.C. and Vijay Kumar (1982) "Ganeshwar-Jodhpura Culture: New Traits in Indian Archaeology", in G.L.Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Recent Perspective*. Oxford & IBH Publishing Co., New Delhi. pp.125-134.

(2) その他の参考文献

42 ギルンド遺跡

2つのマウンドからなるこの遺跡は、25ヘクタールに及ぶ規模をもつ。バナース文化では最大の遺跡とされる (Shinde and Possehl 2005: 294)。東マウンドが周辺地との比高差15m、西マウンドが8mを測る。1959年 (IAR 1959-60) および1999～2003年 (Shinde and Possehl 2005; Shinde *et al.* 2005) の2次に及ぶ発掘調査が実施されている。後者の調査では東西両マウンドが煉瓦積周壁によって囲まれている可能性が指摘されている。発掘調査の結果、金石併用文化期と



ギルンド遺跡 平面図

(Shinde and Possehl 2005 より)



ギルンド遺跡

(撮影：遠藤 仁 ©インダス・プロジェクト)

初期歴史時代、中世期の層序からなり、一部では金石併用文化をさかのぼると推定される時期の細石器と土器が確認されている。

金石併用文化期には大別3時期に分かれる建築遺構群が確認されている。それに基づいて、前・中・後期アーハール=バナース文化が設定されている。(Shinde *et al.* 2005) によれば、東西マウンドの計4カ所で発掘区が設定され、各発掘区で金石併用文化期を中心とする建築遺構が検出されているが、西マウンド (GLD-2) 北東部に設定された発掘区で検出された日干煉瓦積建物が注目される。約1mの間隔をおいて平行して南北に伸びる5本の壁体と東西2本の壁体からなるこの建物は、倉庫建築の基壇に推定されているが、その北半部で検出された粘土張土坑からは印章押捺粘土塊が出土している (Shinde *et al.* 2005)。その印章押捺は幾何学文を特徴とするもので、先文明期からイラン高原、中央アジア、パロチスタン高原で広く用いられた幾何学印章に類似する。また、その系譜を引く BMAC の印章にも類似しており、発掘者は BMAC との関係を重視している (Shinde *et al.* 2005)。詳細な報告書は未刊であるが、ラージャスターン地方南部のバナース文化がインダス文明社会と関係していただけでなく、さらに西の地域とも交流関係を有していたことを物語っている。

【発掘調査機関】

B.B. Lal (Archaeological Survey of India) in 1959
Vasant Shinde and G.L. Possehl (Deccan College and The University of Pennsylvania Museum) in 2001, 2002, 2003

【所在地】

Rajsamand District

【緯度・経度】

25°01'56"N, 74°15'45"E (Shinde and Possehl 2005)

25°01'56.1"N, 74°15'52"E (GPS)

【発掘調査年度】

1959 (IAR 1959-60: 41-46)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Shinde, V. and G.L. Possehl (2005) "A Report on the Excavations at Gilund, 1999-2001", in C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.) *South Asian Archaeology 2001*. Éditions Recherche sur les Civilisations, Paris. pp.293-302.

Shinde, V., G.L. Possehl and M. Ameri (2005) "Excavations at Gilund 2001-2003: The Seal Impressions and Other Finds", in U. Franke-Vogt and H.-J. Weisshaar (eds.) *South*

Asian Archaeology 2003. Linden Soft, Aachen. pp.159-169.

(2) その他の参考文献

43 ジョードプラ遺跡 Jodhpura

上述のガネーシュワル遺跡同様に銅鉱石の産出地近郊に所在するこの遺跡では、発掘調査によってI期：赭色土器文化期、II期（黒縁赤色土器文化期）、III期：彩文灰色土器文化期、IV期：北方黒色磨研土器文化期、V期：シュンガ・クシャーナ朝期という文化編年が設定されている(IAR 1972-73)。ガネーシュワル遺跡とともにアラワリー山脈北部の文明期前後の文化内容を知る上で重要な遺跡であるが、報告書は刊行されていない。なお、発見は1958年度である(IAR 1958-59: 74)。

【発掘調査機関】

R.C. Agrawala and Vijay Kumar (Department of Archaeology and Museums, Rajasthan, 1972)

【所在地】

Jaipur District

【緯度・経度】

【発掘調査年度】

1972 (IAR 1972-73: 29-30)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Agrawala, R.C. and Vijay Kumar (1982) "Ganeshwar-Jodhpura Culture: New Traits in Indian Archaeology", in G.L.Posschl (ed.) *Harappan Civilization: A Recent Perspective*. Oxford & IBH Publishing Co., New Delhi. pp.125-134.

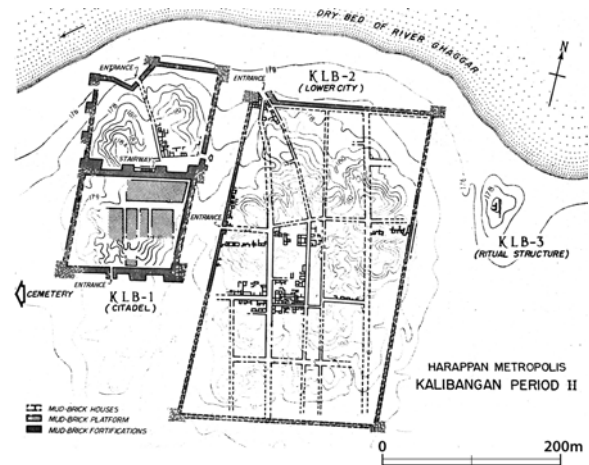
44 カーリーバンガン遺跡 Kalibangan

パンジャブ東部のガッガル川流域を代表する遺跡である。9年度に及ぶ発掘調査によって2時期に分かれる遺跡の様相が明らかにされている。I期は先文明期に属し、ソーティ式土器が出土する。A～Fまでの6群に大別される土器群からなる。

この時期の遺跡は東西約180m、南北約250mに広がり、日干煉瓦積の周壁によって囲まれていたことが明らかにされている。周壁内部では同じく日干

煉瓦積の建物が検出されているが、排水溝にのみ焼成煉瓦が使用されている。瑪瑙・玉随製の小形石刃、凍石・紅玉髓・銅・貝・土製各種の装身具類、動物土偶、骨製尖頭器、銅斧などが出土している。有角の人物像を線刻した板状土製品もこの時期のものとされる。

II期には東西2つのマウンドからなる構成に変化する。すなわち、東の城塞部と西の市街地である。それぞれ周壁によって囲まれ、城塞部は東西約



カーリーバンガン遺跡平面図

(Sharma 1999 より)



カーリーバンガン遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

120m、南北約240mを測り、さらに区画壁によって南北2つの区画に分割されている。南区画では日干煉瓦積の基壇が5～6基検出され、北区画では日干煉瓦積建物が確認されている。南区画は居住区域ではなく、宗教施設を含む特別な区域と推定されている。市街地は東西240m、南北360mで、街路によって区画された街割が確認されている。市街地においても周壁、住居建物ともに日干煉瓦で築かれているが、井戸や排水溝などの水を使用する施設では焼成煉瓦が使用される。市街地の東方80mのところでも遺構が確認されており、宗教施設と推定されている。この時期の前半期にはハラッパー式土器とソーティ式土器が混在し、後半期にはハラッパー式土器のみになるとされる。円筒印章が出土している。さらに城塞部の西南西300mのところでは墓地が存在し、文明期の伸展葬土坑墓、壺棺葬、副葬品埋納坑(もしくは象徴埋葬)が明らかにされている。

パンジャブ地方東部西半部の代表的遺跡であって、先文明期のソーティ式土器は東半部で設定されたシースワール式土器、またチョーリスターン地方で設定されたハークラー式土器との関係性を示す。また、文明期(II期)に関する詳細な報告書は未刊であるが、遺物のみならず東西分離型の平面配置を含めて、パンジャブ地方東部における在地系文化とハラッパー文化の関係を考える上で重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

B.B. Lal (ASI) in 1960

B.K. Thapar (ASI) in 1961

B.B. Lal and B.K. Thapar(ASI) in 1962

B.B. Lal, B.K. Thapar and Jagat Pati Joshi (ASI) in 1968

【所在地】

Ganganagar District

【緯度・経度】

29°05'N, 74°05'E (Ghosh 1989: 194)

29°25'00"N, 74°05'00"E (Possehl 1999: 773)

29°29'N, 74°08'E (Bala 2004: 34)

29°28'22.0"N, 74°07'47.8"E (GPS)

【発掘調査年度】

1960 (IAR 1960-61: 31-2), 1961 (IAR 1961-62: 39-44), 1962 (IAR 1962-63: 20-31), 1963 (IAR 1963-64: 30-39), 1964 (IAR 1964-65: 35-39), 1965 (IAR 1965-66: 38-41), 1966 (IAR 1966-67: 31-33), 1967 (IAR 1967-68: 42-45), 1968 (IAR 1968-69: 28-32)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Lal, B.B., B.K. Thapar, J.P. Joshi and M. Bala (2003) *Excavations at Kalibangan: The Early Harappan (1960-69)*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.98. Archaeological Survey of India, New Delhi.

Thapar, B.K. (1975) Kalibangan: a Harappan metropolis beyond the Indus valley. *Expedition* 17(2):19-32. (Reprinted in Gregory L. Possehl (ed.) (1979) *Ancient Cities of the Indus*. Vikas, New Delhi. pp. 196-202).

(2) その他の参考文献

Bala, M. (2004) "Kalibangan: Its Periods and Antiquities", in Dilip K. Chakrabarti (ed.) *Indus Civilization Sites in India: New Discoveries*. Marg Publication, Mumbai. pp.34-43

Lal, B.B. (1979) "Kalibangan and Indus Civilization", in D.P. Agrawal and Dilip K. Chakrabarti (eds.) *Essays in Indian Protohistory*. B.R. Publishing Corporation, New Delhi. pp. 65-97.

Nigam, J.S. (1996) Sothi pottery at Kalibangan: A reappraisal. *Purātattva* 26: 7-22.

Raikes, R.L. (1968) Kalibangan: Death from natural causes. *Antiquity* 42: 286-291

Sharma, A.K. (1982) "The Harappan cemetery at Kalibangan: a study", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Contemporary Perspective*. Oxford & IBH, Delhi. pp. 297-299.

Sharma, A.K. (1999) *The Departed Harappans of Kalibangan*. Sundeep Prakashan, Delhi.

Thapar, B.K. (1973) "New traits of the Indus Civilization at Kalibangan: an appraisal", in Norman Hammond (ed.) *South Asian Archaeology 1971*. Noyes Press, London. pp. 85-104.

Thapar, B. K. (1977) "Climate during the period of the Indus Civilization: evidence from Kalibangan", in D.P. Agrawal and B.M. Pande (eds.) *Ecology and Archaeology of Western India*. Concept Publications, Delhi. pp. 67-73.

45 ノーフ遺跡 Noh

ガンガー平原からアラワリー山脈へと移行する地域に所在するこの遺跡では、発掘調査によってI期: 赭色土器文化期、II期: 黒縁赤色土器文化期、III期: 彩文灰色土器文化期、IV期: 北方黒色磨研土器文化期、V期: シュンガ・クシャーナ朝朝という文化編年が確認されている (IAR 1964-65)。この文化編



ノーフ遺跡

(撮影：遠藤 仁 ©インダス・プロジェクト)

年は西のジョードプラ遺跡、東のアトランジーケラー遺跡に共通しているが、I期の赭色土器文化期が文明併行期にまでさかのぼるのか、ポスト文明期に位置づけられるのか、詳細な公刊資料がないために判然としない。赭色土器文化の年代的位置づけと他の文化との関係はいまなお不明な点が多く、今後の調査・研究が俟たれるところである。

【発掘調査機関】

R.C. Agrawala and Vijay Kumar (Department of Archaeology and Museums, Rajasthan)

【所在地】

Bharatpur District

【緯度・経度】

27°13'00"N, 77°30'00"E (Possehl 1999: 803)

27°12'37.1"N, 77°32'51.1"E (GPS)

【発掘調査年度】

1963 (IAR 1963-64: 28-29), 1964 (IAR 1964-65: 34-35), 1965 (IAR 1965-66: 38), 1966 (IAR 1966-67: 30-31), 1968 (IAR 1968-69: 26), 1970 (IAR 1970-71: 31-32), 1971 (IAR 1971-72: 41-42)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

46 ノーハル遺跡 Nohar

チョウタング川流域に位置し、ソーティ遺跡の近郊に所在する遺跡で、1978年に試掘調査が実施されている。その結果、先文明期と文明期の文化層が確認されており、ソーティ遺跡やカーリーバンガン遺跡と並んで、ガッガル川およびチョウタング川の流域における文化変遷を考える上での重要な遺跡の

一つである。

【発掘調査機関】

A. Ghosh (ASI) in 1950-51

K.N. Dikshit (ASI) in 1978

【所在地】

Ganganagar District

【緯度・経度】

29°10'00"N, 74°45'00"E (Possehl 1999: 804)

【発掘調査年度】

1950 (Ghosh 1952), 1978 (Dikshit 1984)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書

Dikshit, K.N. (1984) "The Sothi Complex: Old Records and Fresh Observations", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization: Sir Mortimer Wheeler Commemoration Volume*. Books & Books, New Delhi. pp. 532-537.

- (2) その他の参考文献

Dikshit, K.N. (1979) Old Channels of the Ghaggar in Rajasthan - Revisited. *Man and Environment* 3: 105-106.

Dikshit, K.N. (1980) A Critical Review of the Pre-Harappan Cultures. *Man and Environment* 4: 32-43.

Ghosh, A. (1952) The Rajputana Desert - Its Archaeological Aspect. *Bulletin of the National Institute of Sciences of India* 1: 37-42.

47 オージャーナ遺跡 Ojijana

アラワリー山脈北部に位置するこの遺跡では、発掘調査によって3期からなる文化編年が提示されている。いずれの時期も黒縁赤色土器を主体とし、コブウシ形土偶や紅玉髓、瑪瑙、ファイアンス、貝、凍石などの装身具(玉)が出土している。アーハール文化に属する遺跡とされ、前3千年紀から前2千年紀中葉に位置づけられている。

【発掘調査機関】

B.R. Meena and A. Tripathi (Department of Archaeology and Museums, Rajasthan)

【所在地】

Bhilwara District

【緯度・経度】

25°53'N, 74°21'E (Meena and Tripathi 2000: 67)

【発掘調査年度】

1999 (IAR 1999-2000: 128-132)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Meena, B.R. and A. Tripathi (2000) Report on Excavations at Ojiyana in Rajasthan which has yielded antiquities resembling Ahar Culture. *Purātattva* 30: 67-73.

(2) その他の参考文献

48 ソーティ遺跡 Sothi

チョウタング川流域に所在するこの遺跡は約200m×200mの範囲をもち、発掘調査の結果、約1.30mの包含層の下層からソーティ式土器のみ、上層からソーティ式土器とハラッパー式土器が確認されている。1951年にA. Ghoshが発見・試掘を実施して以来、ガッガル平原を代表する先文明期から文明期にかけての代表的な遺跡として学史的に知られてきた。その調査成果はカーリーバンガン遺跡の発掘調査によってその位置づけが明確にされるにいたった。

【発掘調査機関】

A. Ghosh (ASI) in 1951

K.N. Dikshit in 1978

【所在地】

Ganganagar District

【緯度・経度】

29°10'N, 74°50'E (Dikshit 1984)

29°10'00"N, 74°45'00"E (Possehl 1999: 804)

29°11'09.4"N, 74°51'22.1"E (GPS)

【発掘調査年度】

1951 (Ghosh 1952), 1978 (Dikshit 1979)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Dikshit, K.N. (1984) "The Sothi Complex: Old Records

and Fresh Observations", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization: Sir Mortimer Wheeler Commemoration Volume*. Books & Books, New Delhi. pp. 532-537.

(2) その他の参考文献

Dalal, K.F. (1980) A Short History of Archaeological Explorations in Bikaner and Bahawalpur along the 'Lost Saraswati' River. *Indica* 17(1): 4-40.

Dikshit, K.N. (1979) Old Channels of the Ghaggar in Rajasthan - Revisited. *Man and Environment* 3: 105-106.

Dikshit, K.N. (1980) A Critical Review of the Pre-Harappan Cultures. *Man and Environment* 4: 32-43.

Ghosh, A. (1952) The Rajputana Desert - Its Archaeological Aspect. *Bulletin of the National Institute of Sciences of India* 1: 37-42.

Ghosh, A. (1965) "The Indus Civilization: Its Origin, Authors, Extent and Chronology", in V.N. Mishra and M.S. Mate (eds.) *Indian Prehistory 1964*. Deccan College Post Graduate and Research Institute, Pune. pp.113-156.

49 タルカーネーワラー・デーラー遺跡

Tarkhanewala Dera

パキスタンとの国境付近のアヌープガル近郊にある遺跡で、A. Ghoshによって発見され、一部試掘が行われた。その際には基壇上に残された火葬墓群が検出されていたが、2003年度に実施された発掘調査の際には耕作による遺跡の削平が進んでおり、火葬墓群の痕跡は確認されなかった。文明期の日干煉瓦積建物群や儀礼施設と推定される焼土遺構、土器焼成窯などが検出されている。また、インダス式印章を押捺した封泥や印章、土偶、チャート製石刃、



ソーティ遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)



タルカーネーワラー・デーラー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

各種装身具が出土している。

【発掘調査機関】

A. Ghosh (ASI) in 1951

P.K. Trivedi and J.K. Patnaik (ASI) in 2003

【所在地】

Ganganagar District

【緯度・経度】

29°15'00"N, 73°12'00"E (Posschl 1999: 828)

【発掘調査年度】

1951 (Ghosh 1952), 2003 (Trivedi and Patnaik 2004)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Ghosh, A. (1952) The Rajputana Desert - Its Archaeological Aspect. *Bulletin of the National Institute of Sciences of India* 1: 37-42.

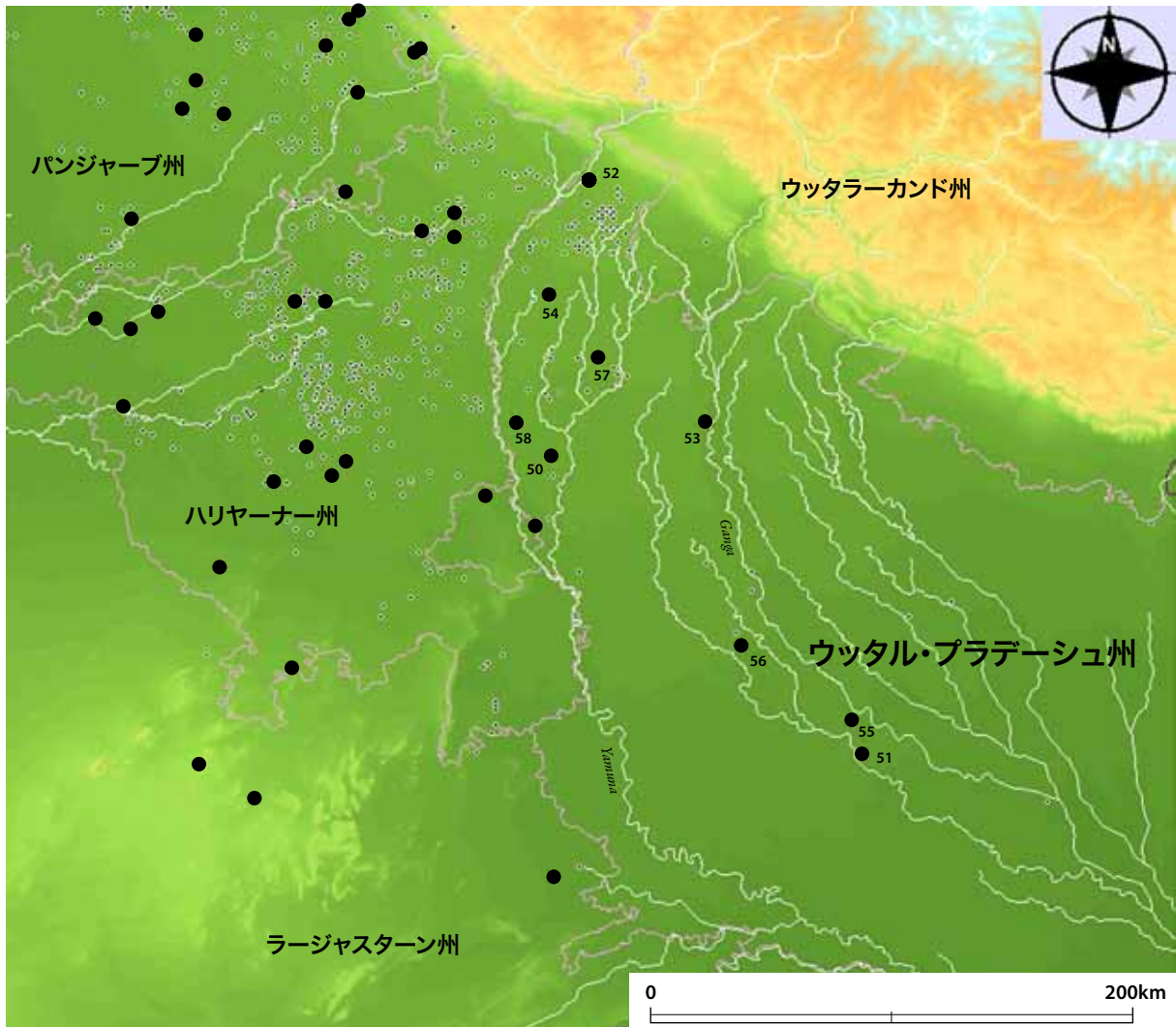
Trivedi, P.K. and J.K. Patnaik (2004) Tarkhanewala Dera and Chak 86 (2003-4). *Purātattva* 34: 30-34.

(2) その他の参考文献

ウッタル・プラデーシュ州

Uttar Pradesh

ウッタル・プラデーシュ州は西部のガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方と、東のガンガー平原に分けられるが、文明期からポスト文明期の遺跡はガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方に集中する。今のところ先文明期の遺跡は確認されていないが、文明期後期までにはハラッパー文化の要素がこの地域に流入し（アールムギールブル遺跡）、ポスト文明期にはバーラー式土器および赭色土器が分布する。また、赭色土器と主体的に関係する可能性が高い埋蔵銅器文化もポスト文明期の社会を考える上で重要である。赭色土器の成立過程は十分に明らかとなっていないが、黒色帯土器伝統の流れを汲んでいることは確かであり、西のガッガル平原との関係のもとで理解を進めていく必要がある。



ウッタル・プラデーシュ州におけるインダス関連遺跡の分布

50 アーラムギールプル遺跡 Alamgirpur

ガンガー＝ヤムナー両河地域にあるこの遺跡では、4期からなる文化編年が提示されている。I期はハラッパー系土器とバーラー式土器の混在層でポスト文明期に位置づけられる。粘土造建物、焼成煉瓦積建物のほか藁圧痕の残る焼土塊が出土している。このほか、土偶、板状土製品、準貴石・ファイアンス製装身具類などが出土している。

【発掘調査機関】

Y.D. Sharma (ASI)

【所在地】

Meerat District

【緯度・経度】

29°29'N, 77°01'E (Ghosh 1989: 11)

29°00'00"N, 77°22'00"E (Possehl 1999: 728)

【発掘調査年度】

1958 (IAR 1958-59: 50-55)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Nath, B. and M.K. Biswas (1969) Animal remains from Alamgirpur. *Indian Museum Bulletin*: 43-52.

51 アトランジーケーラー遺跡 Atranjikhera

ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地帯に位置するこの遺跡は発掘調査報告書が刊行されている重要な遺跡である (Gaur 1983)。発掘調査によってI期：赭色土器文化期、II期：黒縁赤色土器文化期、III期：彩文灰色土器文化期、IV期：北方黒色磨研土器文化期、V期：クシャーナ朝期という文化編年が確認



アーラムギールプル遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©上杉 彰紀)

されている。このうちI期の赭色土器はラール・キラール遺跡出土の資料と共通する。ノーフ遺跡の項で述べたように、西のラージャスターン地方における赭色土器との関係が重要な研究課題である。また、ガンガー・ヤムナー＝ドーアープ地帯における、先文明期の土器を位置づける上でも重要といえよう。

【発掘調査機関】

R.C. Gaur (Aligarh Muslim University)

【所在地】

Etah

【緯度・経度】

27°42'N, 78°44'E (Gaur 1983: 1)

【発掘調査年度】

1960 (IAR 1960-61), 1962 (IAR 1962-63), 1963 (IAR 1963-64), 1965 (IAR 1965-66), 1967 (IAR 1967-68), 1968 (IAR 1968-69), 1979 (IAR 1979-80)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
Gaur, R.C. (1983) *Excavations at Atranjikhera*. Motilal Banarsidass, Delhi.
- (2) その他の参考文献

52 バルガーオン遺跡 Bargaon

1mの文化層をもつこの遺跡では、ハラッパー式土器と赭色土器の出土が報告されているが、ハラッパー式土器とされたのは厳密にはハラッパー系土器とすべきであろう。赭色土器はその表面が著しく摩耗して出土した例が多く（それゆえに赭色土器という曖昧な名称がつけられている）、その実態が長く不明であったが、ラール・キラール遺跡やアトランジーケーラー遺跡などの発掘調査によって、黒色彩文や刻線文、浮文を特徴とする土器であることが明らかになった。バーラー式土器との関係が不明瞭であるが、彩文要素や浮文などバーラー式土器にはみられない要素がある。赭色土器はガンガー＝ヤムナー両河地方を中心に分布するポスト文明期の土器様式と考えられるが、未報告例も多く、あらためてバーラー式土器との関係を検討することが必要である。

【発掘調査機関】

M.N. Deshpande (ASI)

【所在地】

Saharanpur District

【緯度・経度】

30°12'00"N, 77°32'00"E (Possehl 1999: 736)

【発掘調査年度】

1963 (IAR 1963-4: 56-7)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

53 ハスティナープラ遺跡 Hastinapura

ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方に位置するこの遺跡では1950～51年にB.B. Lalによって発掘調査が実施され、ポスト文明期の赭色土器文化期（I期）から前1千年紀前葉～中葉の彩文灰色土器文化期（II期）、前1千年紀後葉の北方黒色磨研土器文化期後期、前1千年紀末から後1千年紀初頭のIV期、後1千年紀後半のV期からなる文化編年が設定されている。この遺跡の調査の段階では最下層の赭色土器と命名された土器群および文化層の実態は不明であったが、彩文灰色土器以前の文化層の存在が層位的に示されたことはこの地域の文化編年の上で重要であった。また、彩文灰色土器がアーリア人に結びつけられたのもこの遺跡の調査においてであり、学史的にも重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

B.B. Lal (ASI)

【所在地】

Meerut District

【緯度・経度】

29°09'N, 78°03'E (Lal 1954: 8; Possehl 1999: 765)

【発掘調査年度】

1950, 1951 (Lal 1954)



ハスティナープラ遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©上杉 彰紀)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
Lal, B.B. (1954) Excavation at Hastinapura and Other Explorations in the Upper Ganga and Sutlej Basins 1950-52. *Ancient India* 10-11: 5-151.
- (2) その他の参考文献

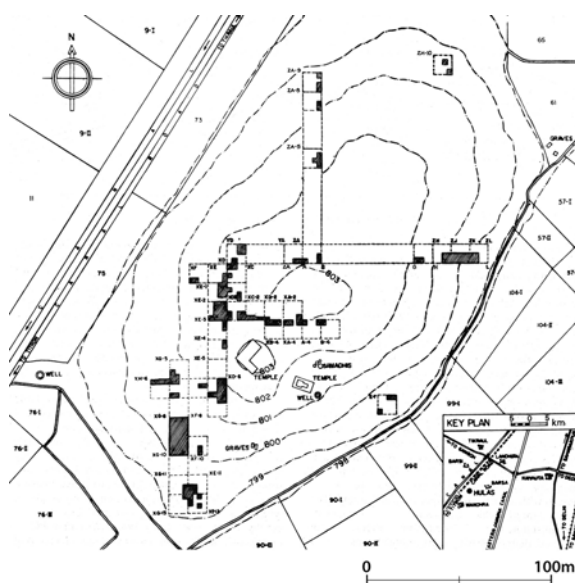
54 フラース遺跡 Hulas

ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方北部に所在するこの遺跡は約330m×172mを測り、発掘調査の結果、I期：ポスト文明期（バーラー文化）、II期：彩文灰色土器文化期、III期：北方黒色磨研土器文化期、IV期：シュンガ＝クシャーナ朝期、V期：グプタ朝期という文化編年が確認されている。

I期の包含層は厚さ1.40mを測り、バーラー式土器を土器の主体として、土製、ファイアンス、瑪瑙・紅玉髓、銅などの各種装身具や動物土偶、車輪形土製品などが出土している。注目されるのはバーラー式土器に混在してハラッパー式土器と判断される土器片が出土していることで、ガッガル平原以東における文明期からポスト文明期への土器様式の移行を考える上で重要である。アールムギールプル遺跡とともに文明期後期を前後とする時期の東限の遺跡といえよう。

【発掘調査機関】

K.N. Dikshit (ASI)



フラース遺跡 平面図

(Dikshit 1982より)

【所在地】

Saharanpur District

【緯度・経度】

29°42'00"N, 77°22'00"E (Possehl 1999: 766)

【発掘調査年度】

1978 (IAR 1978-79: 60-1), 1979 (IAR 1979-80: 82), 1980 (IAR 1980-81: 73-76), 1981 (IAR 1981-82: 72-74), 1982 (IAR 1982-3: 100-103)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Dikshit K.N. (1981) The excavation at Hulas and further exploration of the Uppare Ganga-Yamuna Doab. *Man and Environment* 5: 70-76.

Dikshit K.N. (1982) "Hulas and the Late Harappan Complex in Western Uttar Pradesh", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Contemporary Perspectives*. Delhi: Oxford & IBH. pp. 339-351.

Dikshit, K.N. (1984) The Harappan levels at Hulas. *Man and Environment* 8: 99-100.

(2) その他の参考文献

Saraswat, K.S. (1982) Plant economy of Late Harappan at Hulas. *Purātattva* 23: 1-12.

55 ジャーケーラー遺跡 Jakhera

ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方南東部に位置するこの遺跡では、発掘調査の結果、I期：赭色土器文化期、II・III期：黒縁赤色土器文化期、IV期：彩文灰色土器文化・北方黒色磨研土器文化期という文化編年が設定されている。詳細な報告がなく不明な点が多いが、その位置の近接性も含めてアトランジャーケーラー遺跡と同様の文化変遷を示す遺跡として理解できよう。

【発掘調査機関】

R.C. Gaur (Aligarh Muslim University)

【所在地】

Etah District

【緯度・経度】

【発掘調査年度】

1974 (IAR 1974-75), 1975 (IAR 1975-76), 1985 (IAR 1985-86), 1986 (IAR 1986-87)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

56 ラール・キラール遺跡 Lal Qila

ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地帯に所在するこの遺跡では、赭色土器文化期の集落址が検出されている (Gaur 1995)。この遺跡で出土した赭色土器は彩文を良好にとどめており、その特徴を明確に把握できる上できわめて重要である。それによれば、パンジャーブ地方東部の黒色帯土器伝統に類似するものの、西方のガッガル川流域ではみられない浮文や彩文要素が存在しており、その関連性が研究課題である。発掘調査を実施した R.C. Gaur はポスト文明期に位置づけながらも、先文明期の土器との関係を指摘し、さらにバローチスタン方面との関係をも示唆している。その当否はともかくとしても、ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地帯と西方との関係、ポスト文明期に置けるバーラー文化あるいはミータル IIB 文化との関係など、この遺跡の資料から浮上する研究課題は多い。

【発掘調査機関】

R.C. Gaur (Aligarh Muslim University)

【所在地】

Bulandshahr District

【緯度・経度】

28°10'N, 78°12'E

【発掘調査年度】

1968, 1969, 1970, 1971 (Gaur 1995)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Gaur, R.C. (1995) *Excavations at Lal Qila*. Publication Scheme, Jaipur.

(2) その他の参考文献

57 マンディー遺跡 Mandi

ガンガー＝ヤムナー・ドーアープ地方北部に所在するこの遺跡では、2000年6月に金・紅玉髓・縞瑪瑙・銅製ビーズおよび銅製容器が農地から偶然に発見された。この時の発見物は総重量 10kg に上るといふ。出土状況は明確でないものの、一括して地中に埋納されたものと考えられる。その後、インド政府考古局によって発掘調査が実施され、500g を量る装身

具類が発見されている。発掘に関する詳細な報告はなく不明な点が多いが、アーラムギールプル遺跡やフランス遺跡の出土土器に類似する資料が出土しているとされ、文明期終末に位置づけられる可能性が高い。

【発掘調査機関】

R.S. Bisht (ASI)

【所在地】

Muzzafarnagar District

【緯度・経度】

30°12'00"N, 77°32'00"E (Possehl 1999: 736)

29°26'10"N, 77°34'35"E (Sharma *et al.* 2000: 36; Tewari 2004: 57)

※ Possehl の数値はバルガーオンと同じ。

【発掘調査年度】

Mandi 2000

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sharma, D.V., V.N. Prabhakar, R. Tewari and R.K. Srivastava (2000) Harappan jewellery hoard from Mandi. *Purātattva* 30: 36-41.

Tewari, Rakesh (2004) "A recently discovered hoard of Harappan jewellery from Western Uttar Pradesh", in Dilip K. Chakrabarti (ed.) *Indus Civilization Sites in India: New Discoveries*. Marg Publications, Mumbai. pp. 57-63.

(2) その他の参考文献

58 サナウリー遺跡 Sanauli

ガンガー＝ヤムナー両河地域にあるこの遺跡では、2004年に周辺住民が土取を行った際にポスト文明期の土器が出土したことから遺跡の存在が知ら



サナウリー遺跡

(撮影：小磯 学 ©インダス・プロジェクト)

れるようになり、2005～2006年に発掘調査が実施された。周辺はサトウキビ畑として利用されているため、遺跡の範囲は確定されていないが、3.5ha前後の面積を有する可能性が指摘されている。発掘調査によって116基の墓葬が検出され、伸展葬、二次葬、象徴的埋葬に大別されている。墓葬を含む包含層は層厚2.40mを測り、上・中・下層に区分して各墓葬が位置づけられるとともに出土土器の形態変化についても明らかにされている。出土土器の検討から文明期終末からポスト文明期初頭（前2200～前1800年）にかけて墓地が営まれた可能性が考慮されている。また、注目されるのは副葬品の豊富さで、土器のほかに、金・銅製装身具やファイアンス・凍石製装身具などが出土している。中には埋蔵銅器文化に属する形式の銅剣が副葬品として納められた例がある。

未だ詳細は報じられていないが、文明期後半期からポスト文明期にかけて遺跡が急増するパンジャーブ地方東部からガンガー＝ヤムナー両河地域における社会・文化の様態を理解する上で多大な情報を提供することになる。

【発掘調査機関】

D.V. Sharma (ASI)

【所在地】

Baghpat District

【緯度・経度】

29°08'28"N, 77°13'01"E (Sharma *et al.* 2004: 35)

【発掘調査年度】

2005 (Sharma *et al.* 2006)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sharma, D.V., K.C. Nauriyal, V.N. Prabhakar and Vishnukant (2004) Sanauli: A Late Harappan burial site in the Ganga-Yamuna Doab. *Purātattva* 34: 35-44.

Sharma, D.V., K.C. Nauriyal and V.N. Prabhakar (2006) Excavations at Sanauli 2005-06: A Harappan necropolis in the Upper Ganga-Yamuna Doab. *Purātattva* 36: 166-179.

(2) その他の参考文献

グジャラート州

Gujarat

グジャラート地方は、北部の半砂漠地帯と西部の

カッチ湿原、南部のサウラーシュトラ半島からなる。また、長い海岸線を有するのもこの地域の地形的特徴である。こうした地形的特徴および自然環境の多様性から、周辺地域との関係も含めて複雑な文化変遷が認められる。先文明期には北部を中心にアナルタ式土器が分布するが、サウラーシュトラ半島西部の沿岸地域に位置するパードリー遺跡でも同類の土器が出土しており、この土器様式がきわめて広範に展開していた可能性が高い。このアナルタ式土器は文明期にも在地の土器様式として存続しているが、ハラッパー式土器およびソーラト・ハラッパー式土器との関係は十分に理解されていない。また、文明期後半には黒縁赤色土器が広く分布するが、北のアラワリー山脈との交流関係によるものと考えられる。ポスト文明期には輝赤色土器が分布するが、文

明期の土器様式との系譜関係は判然としない。

59 アムラー遺跡 Amra

層厚 1.8m ほどの文化層をもつこの遺跡では 3 期からなる文化編年が確認されており、I 期がラングプル遺跡 IIB・IIC 期に併行し、II 期が初期歴史時代、III 期が歴史時代に位置づけられている。

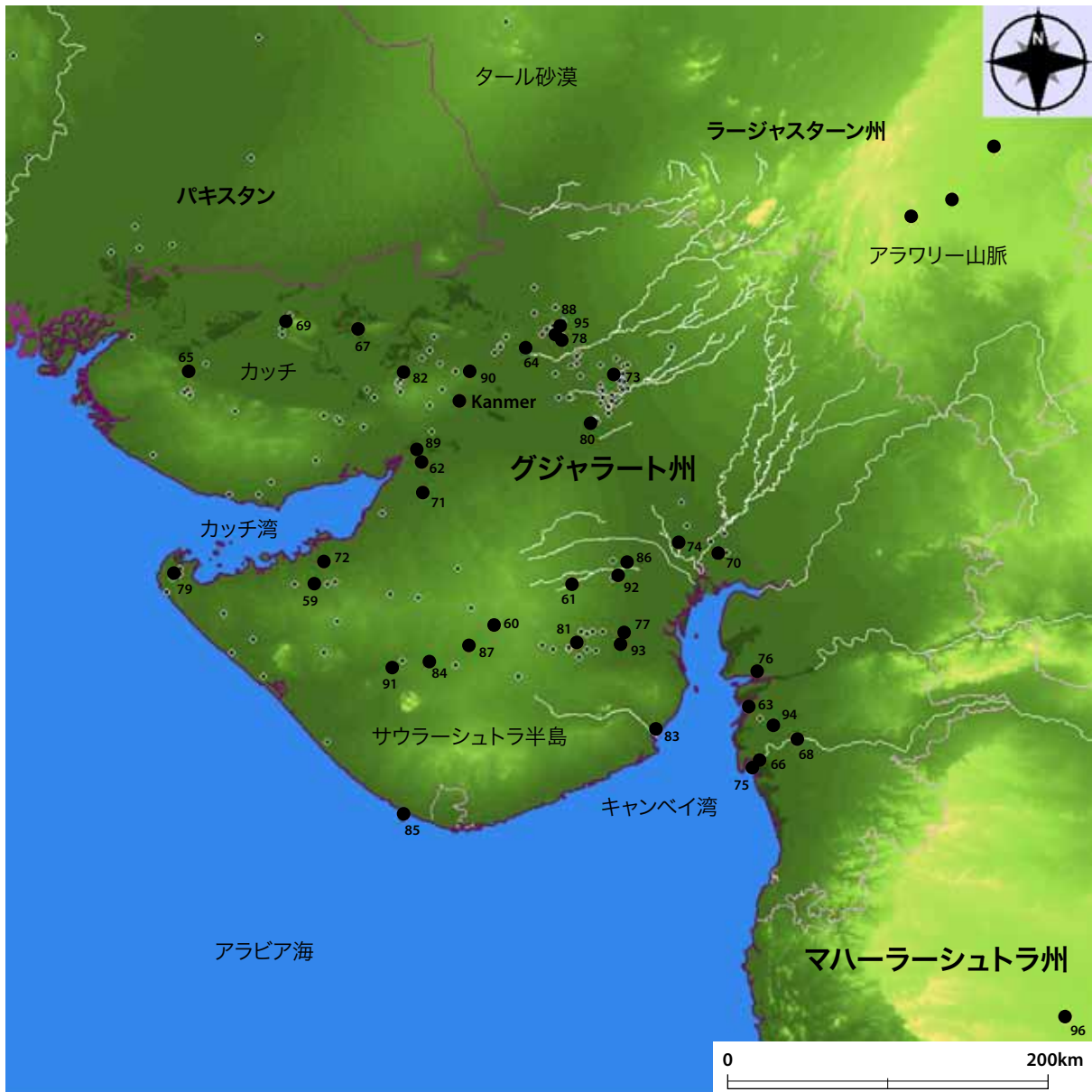
【発掘調査機関】

P.P. Pandya (Gujarat State Department of Archaeology) and B. Subbarao (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Jamnagar District

【緯度・経度】



グジャラート州におけるインダス関連遺跡の分布

22°16'00"N, 69°56'00"E (Possehl 1999: 730)

【発掘調査年度】

1955 (IAR 1955-56: 7)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

60 アトコート遺跡 Atkot

試掘調査によって約 1.5m に及ぶ包含層が確認されており、ハラッパー式土器が出土するとされる。短い報文のみであり (IAR 1957-58)、詳細は不明である。

【発掘調査機関】

P.P. Pandya (Gujarat State Department of Archaeology)

【所在地】

Rajkot District

【緯度・経度】

22°00'00"N, 71°05'00"E (Possehl 1999: 731)

【発掘調査年度】

1957 (IAR 1957-58: 18-19)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

61 バーバル・コート遺跡 Babar Kot

【発掘調査機関】

Gregory Possehl (University of Pennsylvania Museum) and M.H. Raval (Gujarat State Department of Archaeology)

【所在地】

Bhavnagar District

【緯度・経度】

22°16'04"N, 71°34'15"E (Possehl 1999: 732)

【発掘調査年度】

1990

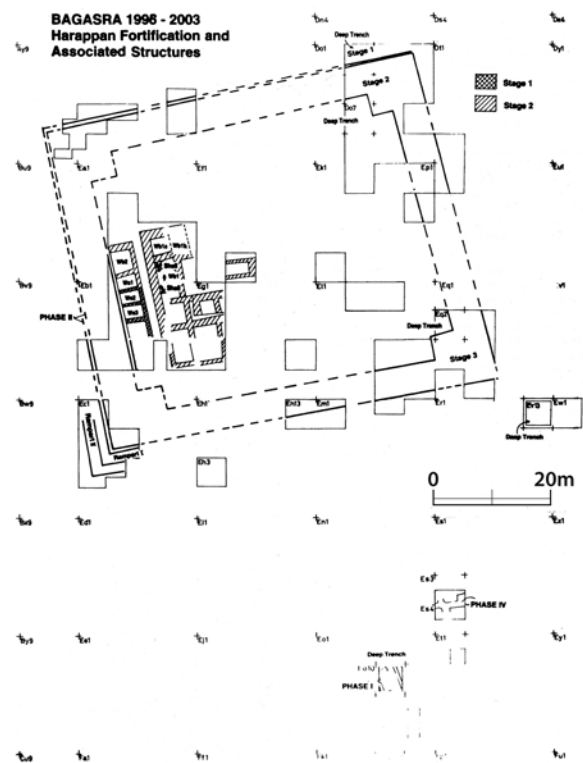
【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

62 バガーサラール (ゴラー・ドーロー) 遺跡

Bagasara (Ghola Dhoro)

サウラーシュトラ半島のカッチ湾湾奥部に位置するこの遺跡は約 160×120m の小規模なマウンドで、8 年度に及ぶ発掘調査の結果、約 7.75m の文化層が確認されている。層序と出土遺物から 4 期に大別され、I～III 期が文明期、IV 期がポスト文明期に位置づけられている (Sonawane *et al.* 2003)。II 期に石積の基礎と日干煉瓦積壁体からなる周壁が造営され、III 期を通じて維持されるが、IV 期にはすでに廃絶している。ただし、周壁が維持されていた時期



バガーサラール遺跡 平面図

(Sonawane *et al.* 2003 より)



バガーサラール遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

においても、周壁外にも居住活動の痕跡は広がっており、周壁が集落の範囲を限定するものではなかったことがわかる。

周壁内部では、海産性巻貝や翡翠原石の集積施設が検出されているほか、ファイアンス製品の製作址など、各種素材の装身具生産が行われていたことを示す遺構が検出されている。これらはII期に位置づけられている。

出土土器では、I・II期にはハラッパー式土器とアナルタ式土器、III・IV期にはソーラト・ハラッパー式土器が主体的に出土したことが報告されている。このうちII期出土資料として実測図が公表されたハラッパー式彩文土器をみると、Quivron 編年で中段階以降に相当する。また、III期からは中段階に位置づけられる高杯が出土している。こうした資料からみて、少なくとも周壁によって囲まれた集落はインダス文明期中頃から後半にかかる頃に位置づけられるであろう。

小規模遺跡ながら周壁によって囲まれるとともに、多彩な工芸品生産が行われていたことは、グジャラート地方における文明期の遺跡の性格や機能を考える上で重要な示唆を与えている。

【発掘調査機関】

V.H. Sonawane (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Rajkot District

【緯度・経度】

22°50'00"N, 70°41'00"E (Possehl 1999: 733)

23°03'N 70°37'E (Sonawane 2004: 79)

23°02'12.4"N, 70°37'12.9"E (GPS)

【発掘調査年度】

1995 (IAR 1995-96: 16-22), 1996 (IAR 1996-97: 19-27), 1997 (IAR 1997-98: 22-32), 1998, 1999 (IAR 1999-2000: 27-30), 2000, 2001, 2002 (Sonawane *et al.* 2003)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Bhan, K.K., V.H. Sonawane, V.H., Ajithprasad and S. Pratapchandran (2005) Excavations of an important Harappan trading and craft production center at Gola Dhoro (Bagasra), on the Gulf of Kutch, Gujarat, India. *Journal of Interdisciplinary Studies in History and Archaeology* 1(2): 153-158.

Sonawane, V.H., Ajithprasad, K.K. Bhan, K. Krishnan, S. Prathapachandra, Abhijit Majumdar, Ajita K. Patel and Jaya Menon (2003) Excavations at Bagasra -1996-2003: A

preliminary report. *Man and Environment* 28(2): 21-50.

(2) その他の参考文献

Deshpande, Arti (1999) A preliminary study of marine molluscan shell remains from Bagasra: A Harappan site in Gujarat. *Purātattva* 29: 111-113.

Patel, Ambika (2006) Copper artifacts from Bagasra (Gola Dhoro) a Harappan site of Gujarat, western India. *Purātattva* 36: 222-231.

63 バガトラウ遺跡 Bhagatraw

インド半東部のキャンベイ湾に面するところに位置するこの遺跡では、小規模な試掘調査が実施されており、I期：文明期からポスト文明期、II期：中世期という文化編年が設定されている。詳細な報告書は刊行されていないが、I期はA・B2期に細別され、IA期は文明期に、IB期はポスト文明期（後期ハラッパー文化期）に位置づけられている。

【発掘調査機関】

S.R. Rao (ASI)

【所在地】

Broach District

【緯度・経度】

21°29'00"N, 72°42'00"E (Possehl 1999: 738)

【発掘調査年度】

1990

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

64 ダトラナー遺跡 Datrana

グジャラート地方北部に所在するこの遺跡は40haを測り、大形石刃石器の製作址が点在する。発掘調査の結果、2期からなる文化編年が設定されており、I期：細石器石器群を特徴とする文化、II期：金石併用文化期とされる。II期には石器のほかに土器と銅器も出土している。出土土器には先プラバース時期に類似するもの、アナルタ式土器、ナーグワダー遺跡の墓葬で出土した土器に類似するものが確認されている。出土土器のみならず広範な石器製作址の存在は、先文明期のグジャラート地方北部の様相を知る上で重要な手掛りとなろう。



ダトラーナー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

【発掘調査機関】

V.H. Sonawane (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Banaskantha District

【緯度・経度】

23°46'30"N, 71°06'30"E (Ajithprasad 2002: 135)

23°47'28.9"N, 71°07'44.6"E (GPS)

【発掘調査年度】

1994 (IAR 1993-94: 25-31), 1994 (IAR 1994-95: 11-16),

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Ajithprasad, P. (2002) "The Pre-Harappan Cultures of Gujarat", in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect vol.I: Prehistory*. ICHR/Manohar, New Delhi. pp. 129-158.

65 デーサルプル遺跡 Desalpur

面積 130×100m、高さ 3m を測るこの遺跡では日干煉瓦と粗石を積み上げた周壁によって囲まれ、その内部で板石あるいは粗石を主体とする建築遺構が検出されている。日干煉瓦もまた一部で使用されている。最下層 (IA 期) においてハラッパー式土器、スリップ搔落文土器 (reserved slip ware) が出土している。また、伴出する厚手の沈線文土器については、ロータル遺跡やロージディー遺跡の出土土器との共通性が指摘されている。このほかには、凍石製インダス式印章 1 点、銅製印章 1 点、封泥 1 点、板状土製品、動物土偶、各種装身具類、銅器が報告されている。IB 期になると、白色スリップ地の黒色彩文土器や黒縁赤色土器が出土しており、ポスト文明期

に位置づけられている。

【発掘調査機関】

K.V. Soundara Rajan (ASI)

【所在地】

Kachchh District.

【緯度・経度】

23°25'N, 69°10'E (Ghosh 1989: 119)

23°37'00"N, 69°08'00"E (Possehl 1999: 752)

※ (Ghosh 1989) においては 60°10' の数値が示されているが、上記の通り 69°10' の誤りであろう。

【発掘調査年度】

1963 (IAR 1963-4: 10-12)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

66 ダートヴァー遺跡 Dhatva

タプティ川流域に位置するこの遺跡では、発掘調査によって 2 時期からなる文化層が確認されている (Mehta *et al.* 1975)。I 期はポスト文明期、II 期は初期歴史時代に相当する。出土土器はサウラーシュトラ半島およびマールワ地方の土器に類似するとされる。グジャラート地方のポスト文明期の文化とデカン金石併用文化の関係を考える上で重要な遺跡である。

【発掘調査機関】

R.N. Mehta (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Surat District

【緯度・経度】

21°09'00"N, 72°46'00"E (Possehl 1999: 754)

【発掘調査年度】

1967 (IAR 1967-8: 19-20)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
Mehta, R.N., S.N. Chowdhary, K.T.M. Hegde and D.R. Shah (1975) *Excavation at Dhatva*. M.S. University, Baroda.
- (2) その他の参考文献

67 ドーラーヴィーラー遺跡 Dholavira

1990 年代を中心に実施されたドーラーヴィーラー

遺跡の調査は、インド領内において最も注目されたものである。13年度に及ぶ発掘調査の結果、I～VII期に及ぶ文化編年の確立と、IV期以降の都市形態の変遷という成果がもたらされている。残念ながら正式報告書は未刊であるが、I～III期が先文明期、IV・V期が文明期、VI・VII期がポスト文明期に位置づけられている。

先文明期にはアナルタ式土器を含むグジャラート在地の土器が主体的に出土し、文明期にハラッパー式土器やインダス印章が加わる。深堀トレンチの調査によれば、すでにI期には石積もしくは煉瓦積の周壁が一部にせよ築かれ、IV期には岩盤を削り貫いて築かれた貯水槽によって囲まれる城塞部および居住区を備えた都市形態が成立する。

城塞部、居住区の各所で準貴石製ビーズの製作址が確認されており、グジャラート地方で産出する各種石材を素材とした装身具生産が遺跡の一つの機能であったと推定される。また、カッチ地方に産出する砂岩がハラッパー遺跡にまで搬出されていることも指摘されており（Law and Burton 2006）、ドーラーヴィーラー遺跡はそうした広域流通システムの拠点の一つであったと考えてよいであろう。

VI期にはV期までの市街区の大部分が放棄され、城塞部を中心とした区域に居住範囲が縮小することが確認されている。また、この時期には白色彩文黒縁赤色土器が出現する。上述の通り、発掘者は都市の衰退現象を捉えてポスト文明期に位置づけているが、土器の様相はスールコータダー遺跡IC期に共通するとともに、ハラッパー遺跡3C期に特徴的なインダス文字のみを刻んだ印章の出土が報告されていることから、VI期は文明終末期に位置づけるのが適切であろう。VII期は実年代が特定されていないが、円形の石積住居に示されるように都市が完全に廃絶して以降の所産である。

カッチ地方はシンド地方と諸資源の原産地であるグジャラート地方を結ぶ地域であるとともに、アラビア海に進出する上でも戦略的な重要性を有している。ドーラーヴィーラー遺跡で発掘された大規模な都市はまさにその戦略的重要性に基盤を置くものと考えられる。グジャラート地方北部からカッチ地方には先文明期にアナルタ式土器と呼ばれる土器が広く分布するが、その担い手とグジャラート地方の諸資源の開発の関係、さらには西のシンド地方との関係、すなわちハラッパー文化との関係が注目されよう。



ドーラーヴィーラー遺跡 平面図
(Joshi and Bisht 1994 より)



ドーラーヴィーラー遺跡
(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

【発掘調査機関】

R.S.Bisht (ASI)

【所在地】

Kachchh District

【緯度・経度】

23°53'10"N, 70°13'00"E (Possehl 1999: 754)

23°53'14.7", 70°12'48.3"E (GPS)

【発掘調査年度】

1984 (IAR 1984-85: 14, 17), 1989 (IAR 1989-90: 15-21), 1990 (IAR 1990-91: 10-12), 1991 (IAR 1991-92: 26-34), 1992 (IAR 1992-93: 27-31), 1993, 1994, 1996 (IAR 1996-97: 11-19), 1997 (IAR 1997-98: 19-22), 1998 (IAR 1998-99: 6-7), 1999 (IAR 1999-2000: 22-27), 2003, 2004, 2005

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Bisht, R.S. (1991) Dholavira: a new horizon of the Indus Civilization. *Purātattva* 20: 71-82.

(2) その他の参考文献

Bisht, R.S. (1989a) "A new model of the Harappan town planning as revealed at Dholavira in Kutch: a surface study of its plan and architecture", Bhaskar Chatterjee (ed.) *History and Archaeology: Professor H. D. Sankalia Felicitation Volume*. Ramanand Vidya Bhawan, Delhi. pp. 397-408.

Bisht, R.S. (1989b) The Harappan colonization of Kutch: an ergonomic study with reference to Dholavira and Surkotada, L. Gopal (ed.) *History and Art*. Ramanand Vidya Bhawan, Delhi. pp. 265-272.

Bisht, R.S. (1999) Dholavira and Banawali: Two different paradigms of the Harappan urban form. *Purātattva* 29: 14-37.

Bisht, R.S. (2005) "The Water Structures and Engineering of the Harappans at Dholavira (India)", in C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.) *South Asian Archaeology 2001*. Éditions Recherche sur les Civilisations, Paris. pp. 11-25.

Bisht, R.S. (2007) "The Harappan Water Structures at Dholavira", in S.P. Shukla, R.S. Bisht, M.P. Joshi and Prashant Srivastava (eds.) *History and Heritage (In Honour of Prof. Kiran Kumar Thaplyal)*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp.39-66.

Law, R.W. and J.H. Burton (2006) "A Technique for Determining the Provenance of Harappan Banded Limestone "Ringstones" Using Icp-Aes", in J. Pérez-Arantegui (ed.) *Proceedings of the 34th International Symposium on Archaeometry, Zaragoza, 3-7 May 2004*.

Institución Fernando el Católico, Zaragoza. pp.309-314.

68 ジョーカー遺跡 Jokha

インド半島部に位置するこの遺跡は 150×100m の小規模遺跡で、発掘調査の結果、I 期：ポスト文明期、II 期：初期歴史時代、III 期：歴史時代という文化編年が設定されている。I 期にはポスト文明期の土器とマールワー式土器、ジョールウェー式土器が出土しているとされる。ポスト文明期におけるグジャラート地方とデカン高原との関係を示す遺跡といえよう。

【発掘調査機関】

R.N. Mehta (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Surat District

【緯度・経度】

21°17'00"N, 73°00'00"E (Possehl 1999: 771)

【発掘調査年度】

1966 (IAR 1966-67: 10)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Mehta, R.N., S.N. Chowdhary, K.T.M. Hegde and D.R. Shah (1971) *Excavation at Jokha*. Maharaja Sayajirao University, Baroda.

(2) その他の参考文献

69 ジュニー・クラン遺跡 Juni Kuran

カッチ地方西部に位置するパステーム・ベート島北西部に位置するこの遺跡では、発掘調査によって I 期：文明期、II 期：ポスト文明期という文化編年が設定されている (Pramalik 2004)。城塞部と居住域が推定されており、城塞部は石積周壁によって囲繞されていたことが明らかにされている。詳細は不明ながら、2ヶ所の城門施設、列柱を伴う施設、さらに2ヶ所のスタジアムと呼ばれる空間が報告されている。

ドーラーヴィーラー遺跡に類似する構造をもつ遺跡の発見は、カッチ地方のもつ戦略的重要性を考える上で重要である。

【発掘調査機関】

S. Pramalik (ASI)



ジュニー・クラン遺跡
(Pramalik 2004 より)



ジュニー・クラン遺跡
(撮影：長田俊樹 ©インダス・プロジェクト)



ジュニー・クラン遺跡
(撮影：長田俊樹 ©インダス・プロジェクト)

【所在地】

Kachchh District

【緯度・経度】

23°27'N, 69°47'E (Pramalik 2004: 45)

23°57'44.30"N, 69°45'54.20"E (Google Earth)

※ (Pramalik 2004) の緯度・経度は誤記で、Google Earth で確認したものが正しい。

【発掘調査年度】

2003 (Pramalik 2004)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Pramanik, Shubhra (2004) Excavation at Juni Kuran 2003-04: A preliminary report. *Purātattva* 34: 45-67.

(2) その他の参考文献

70 カーネーワール遺跡 Kanewal

キャンベイ湾奥部のサバルマティー川河口付近に位置するこの遺跡は、カーネーワール湖のほとりに立地する。2ヶ所に設定された発掘区での発掘調査の結果、細石刃石器群を特徴とする文化と、文明終末期からポスト文明期初期と推定される時期の居住痕跡が確認されている。遺構としては計4基の平面円形の平地式小屋状住居が検出されている。いずれも柱穴を伴う。これらの住居址からは文明終末期頃の土器が伴って出土している。土器はソーラト・ハラッパー式土器系統の土器群と輝赤色土器を中心とする。都市的集落とは異なる村落の遺跡とみなすことができよう。

【発掘調査機関】

K.N. Momin (M.S. Univeristy)

【所在地】

Kheda District

【緯度・経度】

22°28'00"N, 72°30'00"E (Possehl 1999: 774)

【発掘調査年度】

1977 (IAR 1977-78: 21)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Momin, K.N. (1982) "Excavations at Kanewal", in R.K. Sharma (ed.) *Indian Archaeology: New Perspectives*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp.142-147.

Mehata, R.N., K.N. Momin and D.R. Sharma (1980) *Excavations at Kanewal*. M.S. University, Baroda.

(2) その他の参考文献

71 クンターシー遺跡 Kuntasi

サウラーシュトラ半島北西部のカッチ湾湾奥部に面するところに位置するこの遺跡は、約 150m×100m の小規模遺跡で、発掘調査によって I 期：文明期、II 期：ポスト文明期という文化編年が設定されている。さらに A～C 期に細別される建築段階が確認されており、うち A・B 期が I 期に、C 期が II 期に相当する。B 期に属する建築遺構が広範に検出されており、石積の基礎と日干煉瓦の壁体によって構成される。居住域は二重の周壁によって囲まれており、東側に通用門が、南西に見張台に推定される基壇が検出されている。

ファイアンス製印章 1 点、準貴石製ビーズを代表とするさまざまな遺物が出土している。土器でみると、I・II 期ともにソーラト・ハラッパー式土器が主体で、少量のハラッパー式土器が加わる。典型的なハラッパー式彩文土器はないが、I 期に木葉文を描いた小形 S 字形甕があり、Quivron 編年の中段階以降に相当すると考えられる。

発掘者である Dhavalikar はこの遺跡を工芸品生産拠点かつ交易拠点として評価する。準貴石製ビーズの中に未成品が存在することや海産性巻貝を素材とした腕輪製作の残滓の出土など、工芸品の生産工程に関わる資料が出土しているが、同様の資料はグジャラート地方の遺跡で広く出土しており、クンターシー遺跡を生産拠点とみなしうるかどうか、他の遺跡との関係を吟味する必要がある。

ただし、バガーサラ遺跡のように、こうした小規模な遺跡がグジャラート地方のインダス遺跡に多く存在し、工芸品生産・流通の一端に関与していた可能性はきわめて高く、インダス文明社会におけるグジャラート地方の役割を考える上で重要な視点である。

【発掘調査機関】

M.K. Dhavalikar (Deccan College) and Y.M. Chitalwala (Gujarat State Department of Archaeology)

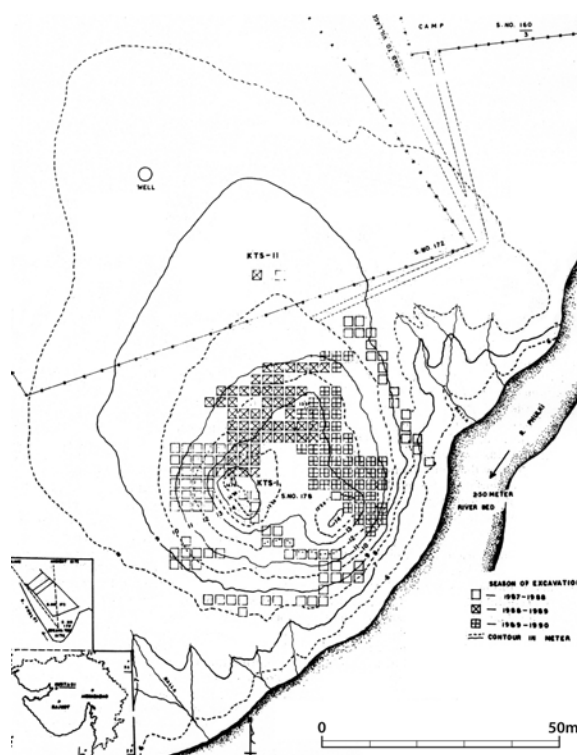
【所在地】

Little Rann of Kachchh, Rajkot District

【緯度・経度】

22°54'40"N, 70°37'30"E (IAR 1987-88: 17)

22°45'N, 70°36'E (Dhavalikar, Raval and Chitalwala 1996:



クンターシー遺跡 平面図

(Dhavalikar et al. 1996)



クンターシー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

15)

22°50'40"N, 70°37'30"E (Possehl 1999: 786)

22°53'31.9"N, 70°36'00.4"E (GPS)

【発掘調査年度】

1987 (IAR 1987-88: 17-19), 1988 (IAR 1988-89: 11), 1989 (IAR 1989-90: 22-23)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Dhavalikar, M. K., M.R. Raval and Y.M. Chitalwala (1996)

Kuntasi: a Harappan Emporium on West Coast. Deccan College Post-Graduate Research Institute, Pune.

(2) その他の参考文献

Dhavalikar, M. K. (1992) "Kuntasi: An Harappan port

in western India”, Catherine Jarrige (ed.) *South Asian Archaeology 1989*. Prehistory Press, Madison. pp. 73-82.

Dhavalikar, M. K. (1993) “Harappans in Saurashtra: the merchantile model as seen from recent excavations at Kuntasi”, Gregory L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Recent Perspective*. Oxford & IBH, Delhi. pp. 555-568.

72 ラカーバーワル遺跡 Lakhavaval

層厚 2.4m ほどの文化層をもつこの遺跡では 3 期からなる文化編年が確認されており、I 期がラングプル遺跡 IIB・IIC 期に併行し、輝赤色土器と黒縁赤色土器が報告されている。II 期が初期歴史時代、III 期が歴史時代に位置づけられている。

【発掘調査機関】

P.P. Pandya (Gujarat State Department of Archaeology) and Subbarao (M.S. Univeristy)

【所在地】

Jamnagar District

【緯度・経度】

22°24'N, 70°00'E (Ghosh 1989: 249)

22°24'00"N, 70°00'00"E (Possehl 1999: 787)

【発掘調査年度】

1955 (IAR 1955-6: 7)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

73 ローテーシュワル遺跡 Loteshwar

グジャラート地方北部に所在するこの遺跡では、発掘調査によって、I 期：細石器石器群を特徴とする文化、II 期：金石併用文化期の 2 期からなる文化編年が設定されている。単純な幾何学彩文とミガキ調整を特徴とする赤色土器と砂粒を含む粗製の赤色土器を特徴とするアナルタ式土器の内容が明確にされた最初の遺跡である。動物遺存体の分析を通して、アナルタ式土器を特徴とする文化はウシを主体とする牧畜民が担ったものである可能性が指摘されている (Patel 2008)。アナルタ式土器はグジャラート地方北部に広く分布するが、その中でもローテーシュワル遺跡は前 4 千年紀前半にさかのぼる可能性をもつ最古段階の遺跡と推定されている (Patel 2008)。

【発掘調査機関】

M.S. University of Baroda

【所在地】

Mahesana District

【緯度・経度】

23°36'00"N, 71°50'20"E (Ajithprasad 2002: 139)

【発掘調査年度】

1991

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

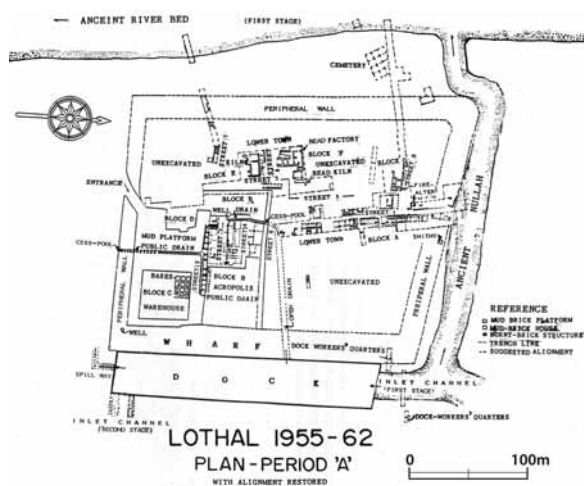
Ajithprasad, P. (2002) “The Pre-Harappan Cultures of Gujarat”, in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect vol.I: Prehistory*. ICHR/Manohar, New Delhi. pp. 129-158.

Patel, A.K. (2008) “New Radiocarbon Determinations from Loteshwar and their Implications for Understanding Holocene Settlement and Subsistence in North Gujarat and Adjoining Areas”, in E.M. Raven (ed.) *South Asian Archaeology 1999*. Egbert Forsten, Groningen. pp.123-134.

Sonawane, V.H. and P. Ajithprasad (1994) Harappa Culture and Gujarat. *Man and Environment* 19(1-2): 129-139.

74 ロータル遺跡 Lothal

キャンベイ湾の湾口から 10km 内陸に入ったところに位置するこの遺跡では、発掘調査の結果層厚 7m の文化層が確認されており、A・B2 期に大別され、両期あわせて 5 面 (I ~ V 面) の遺構面が把握されている。I 面と II 面の間には洪水層が存在しており、II 面の段階で洪水対策を目的として日干煉瓦積基壇が築かれ、その上に城塞部と市街地を接続させ全体を東西 400m、南北 300m の周壁で圍繞した一体型の街割が設計される。城塞部は東西 117m、北面 136m、南面 111m の台形を呈し、内部に日干煉瓦積による大形建物と小形建物が検出されている。市街地では、銅器、金製品、貝製品、玉製作の各種工房跡が検出されている。また、周壁の西側に接して船溜り (ドック) に推定される東西 36m、南北 214m の焼成煉瓦積遺構が確認されている。周壁内部の南東隅では 3.6m 四方、高さ 1m の日干煉瓦積基壇が整然と並んだ遺構が検出されており、倉庫群と推定されている。B 期になると、A 期の街割は廃絶し、



ロータル遺跡 平面図
(Rao 1979 より)



ロータル遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

粗雑な建物が築かれるようになる。また、市街地の北西で A 期に属する墓地が確認されており、20 期の墓が発掘されている。

各種製品の工房跡、倉庫群およびドックに推定される遺構群が発出されたこの遺跡は、その位置も含めてインダス文明期の交易活動、とりわけ海洋交易の実態について検討する上できわめて重要な遺跡である。表面採集ながらにペルシャ湾岸で用いられたデイルムン式印章や 70 点のインダス式印章、65 点に及ぶ封泥、さらには銅インゴットが出土していることもこの遺跡の重要性を物語っている。さらに生業に関していえば B 期からイネが出土することも重要である。

【発掘調査機関】

S.R. Rao (ASI)

【所在地】

Ahmadabad District

【緯度・経度】

22°31'N, 72°15'E (Ghosh 1989: 257)

22°31'25"N, 72°14'59"E (Possehl 1999: 790)

22°31'16.2"N, 72°14'59.2"E (GPS)

【発掘調査年度】

1954 (IAR 1954-5: 12), 1955 (IAR 1955-6: 6-7), 1956 (IAR 1956-7: 15-16), 1957 (IAR 1957-8: 11-13), 1958 (IAR 1958-9: 13-15), 1959 (IAR 1959-60: 16-18), 1961 (IAR 1961-2: 9-10), 1962 (IAR 1962-3: 7)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Rao, S. R. (1979/1985) *Lothal: A Harappan Port Town (1955-62)*, vols.I-II. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.78. Archaeological Survey of India, New Delhi.

(2) その他の参考文献

Bindra, S.C. (2002-3) Lothal: A Harappan port town revisited. *Purātattva* 33: 1-22.

Leshnik, Lawrence S. (1968a) The Harappan port at Lothal: another view. *American Anthropology* 70(5): 911-922.

Pandya, Suman (1977) "Lothal dockyard hypothesis and the sealevel changes", in, D.P. Agrawal and B.M. Pande (eds.) *Ecology and Archaeology of Western India*. Concept Publications, Delhi. pp. 99-103.

Pandya, Suman (1987) "Protohistoric floods at Lothal: a critical study", in B.M. Pande and B.D. Chattopadhyaya (eds.) *Archaeology and History: Essays in Memory of Sh. A. Ghosh*. Agam Kala Prakashan, Delhi. pp. 177-186.

Possehl, Gregory L. (1976) "Lothal: a gateway settlement

of the Harappan Civilization”, in K.A.R. Kennedy and G.L. Possehl (eds.) *Ecological Backgrounds of South Asian Prehistory*. Cornell University South Asian Program, Ithaca. pp. 118-131.

Rao, S.R. (1963) Persian Gulf seal from Lothal. *Antiquity* 37: 96-99.

Rao, S.R. (1968) Contacts between Lothal and Susa, *Proceedings of the Twenty-sixth International Congress of Orientalists* 2: 35-37.

Rao, S.R. (1973) *Lothal and the Indus Civilization*. Asian Publishing House, Bombay.

Yule, Paul (1982) *Lothal: Stadt der Harappa-Kultur in Nordwestindien*. C.H. Beck, München.

75 マールヴァン遺跡 Malvan

インド半東部のタプティ川南岸に位置するこの遺跡では発掘調査の結果、ポスト文明期に推定されるI期と年代は示されないが歴史時代に相当すると考えられるII期からなる文化編年が提示されている(Allchin and Joshi 1995)。I期に関しては前1400～前1000年という年代が示されている。I期の出土土器をみると、赤色土器、黒縁赤色土器、褐色土器、粗製土器、黒灰色系土器、輝赤色土器が報告されているが、赤色土器にはソーラト・ハラッパー式土器に類似する交叉連弧文もみられる。

【発掘調査機関】

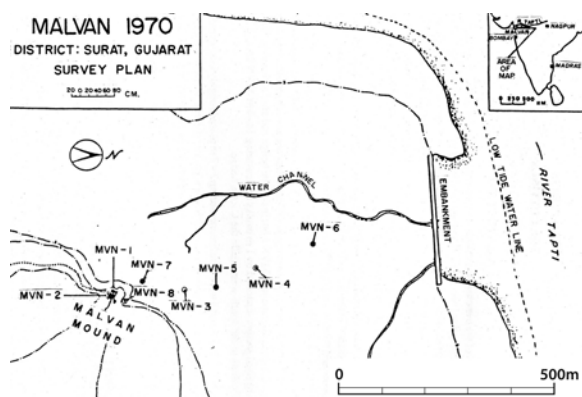
Jagat Pati Joshi (ASI) F.R. Allchin (Cambridge University)

【所在地】

Surat District

【緯度・経度】

21°71'N, 72°42'E (Allchin and Joshi 1995: 11)



マールヴァン遺跡 平面図

(Allchin and Joshi 1995 より)

21°06'00"N, 72°43'00"E (Possehl 1999: 793)

【発掘調査年度】

1969 (IAR 1969-70:7-9)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Joshi, J.P. and F.R. Allchin (1970) Malvan: Further light on the southern extension of the Indus Civilization. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Iceland* 20.

Joshi, J.P. and F.R. Allchin (1995) *Excavations at Malvan*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.92. Archaeological Survey of India, New Delhi.

(2) その他の参考文献

Joshi, J.P. and F.R. Allchin (1972) "Malvan", in S.B. Deo (ed.) *Archaeological Congress and Seminar Papers*. Nagpur University, Nagpur. pp. 36-42.

Vishnu-Mittre and Chhaya Sharma (1973) Pollen analysis of the salt flat at Malvan, Gujarat. *Palaeobotany* 22(2): 118-123.

76 メヘガム遺跡 Mehgam

ナルマダー川河口のバルーチ近郊に所在するこの遺跡では試掘調査が実施されており、ラングプル遺跡 IIB 期後半の資料に類似するとされる壺・浅鉢・高杯などの土器が出土している (IAR 1957-58: 15, 17)。一部公表されている土器の実測図から判断すると、文明終末期からポスト文明期に位置づけられるであろう。

【発掘調査機関】

S.R. Rao (ASI)

【所在地】

Broach District

【緯度・経度】

21°42'00"N, 72°45'00"E (Possehl 1999: 796)

【発掘調査年度】

1957 (IAR 1957-58: 15-17)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

77 モーティーダラーイー遺跡 Motidharai

詳細な報告はないが、試掘調査の結果、文明期と

初期歴史時代に推定される文化層序が確認されている (IAR 1957-58: 20)。

【発掘調査機関】

P.P. Pandya (Gujarat State Department of Archaeology)

【所在地】

Bhavnagar District

【緯度・経度】

21°57'00"N, 71°54'00"E (Possehl 1999: 798)

【発掘調査年度】

1957 (IAR 1957-8: 20-21)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

78 モーティー・ピープリー遺跡 Moti Pipli

リトル・ランに面するグジャラート地方北部に位置するこの遺跡では、発掘調査の結果、細石刃石器群を出土する層準の上位から先文明期終末頃を中心とする土器、石器、各種素材装身具類、銅器などが出土している。

詳細な報告書は未刊であるが、土器はアナルタ式土器と、ナーグワダー遺跡、サントリー遺跡の墓葬で出土したシンド・バローチスターン南部との関連性が指摘される土器が出土している。後者の土器が墓葬のみならず集落遺跡でも出土するという事実は、先文明期終末頃のグジャラート地方北部と西方との交流関係の内容を考える上で重要である。

【発掘調査機関】

P. Ajithprasad and V.H. Sonawane (M.S. Univeristy)

【所在地】

Banaskantha District



モーティ・ピープリー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

【緯度・経度】

23°49'25"N, 71°31'00"E (Possehl 1999: 798)

23°49'24.9"N, 71°30'01.8"E (GPS)

【発掘調査年度】

1993 (IAR 1992-93: 15-19)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
 - (2) その他の参考文献
- Ajithprasad, P. (2002) "The Pre-Harappan Cultures of Gujarat", in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect vol.I: Prehistory*. ICHR/Manohar, New Delhi, pp. 129-158.
- Majumdar, A. (1998-99) Early Harappan Settlements in North Gujarat. *Prāgdhārā* 9: 15-25.
- Majumdar, A. and V.H. Sonawane (1996-97) Pre-Harappan burial pottery from Moti Pipli: a new dimension in the cultural assemblage of north Gujarat. *Prāgdhārā* 7: 11-17.

79 ナーゲシュワル遺跡 Nageshwar

サウラーシュトラ半島南西端に位置するこの遺跡では、発掘調査の結果、a・b2期に細分される文明期の文化層序が確認されている (Hegde *et al.* 1990)。a期については粘土張りの床面が検出されたのみであったが、b期には石積建築遺構が検出され、その一角から海産性巻貝の集積が発見されている。それらは切断面を残しており、貝製装身具類の製作工程のある段階で保管されていたものと推測される。

出土土器をみると、ハラッパー式土器とソーラト・ハラッパー式土器が出土しており、ハラッパー式彩文土器には Quivron 編年古段階から中段階に相当する資料が出土している。ハラッパー式彩文土器はa期に多く、b期には著しく減少するという。

インダス文明を代表する器物である海産性巻貝を用いた装身具の生産・流通システムを考える上できわめて重要な遺跡である。その生産にハラッパー文化が関与していたこと、文明後半期には在地の文化集団がその担い手になった可能性を示唆している。

【発掘調査機関】

K.T.M. Hegde (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Jamnagar District

【緯度・経度】

22°18'00"N, 69°02'00"E (Possehl 1999: 800)

22°20'N 69°03'E (Sonawane 2004: 71)

【発掘調査年度】

1983 (IAR 1983-4: 17-18)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Hegde, K.T.M., K.K. Bhan, V.H. Sonawane, K. Krishnan and D.R. Shah (1990) *Excavation at Nageswar, Gujarat: A Harappan Shell Working Site on the Gulf of Kutch*. Maharaja Sayajirao University, Baroda.

(2) その他の参考文献

Bhan, K.K. and J.M. Kenoyer (1984) Nageswara: A Mature Harappan shell working site on the Gulf of Kutch. *Journal of the Oriental Institute* 34(1-2): 67-80.

Sonawane, V.N. (2004) "Nageshwar: A centre of Harappan shell craft in Saurashtra", in Dilip K. Chakrabarti (ed.) *Indus Civilization Sites in India: New Discoveries*. Marg Publications, Mumbai. pp.71-79.

80 ナーグワダー遺跡 Nagwada

グジャラート地方北部に位置するこの遺跡では、4ヶ所のマウンドのうち1ヶ所で発掘調査が実施されている (Hegde *et al.* 1988)。確認された遺構・遺物の中心は文明期に属するものであるが、4基の墓葬からは先文明期終末頃の土器が出土している。

墓葬出土の土器は在地のアナルタ式土器ともハラッパー式土器とも異なるもので、シンド地方もしくはバローチスタン高原南部との関係が示唆される土器である。モーティ・ピープリー遺跡、サーントリー遺跡、スールコータダー遺跡の墓葬を中心とする土器に共通するもので、文明終末期の地域間交流を考える上で重要である。

居住域からは瑪瑙、アマゾナイト、貝を石材とするビーズ生産と海産性巻貝を素材とする腕輪の生産を示唆する遺物が出土している。土器ではハラッパー式土器のほかに白色彩文黒縁赤色土器やアナルタ式土器が出土している。植物文を描いたハラッパー式彩文土器は Quivron 編年の中段階に相当するものであろう。居住域は、黒縁赤色土器の存在も勘案して、文明期中葉から後葉の遺跡である可能性が高い。

【発掘調査機関】

K.T.M. Hegde (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Surendranagar District

【緯度・経度】

23°20'N, 71°41'E (IAR 1987-88: 19)

23°17'20"N, 71°41'30"E (Possehl 1999: 800)

20°30'N, 71°41'E (Sonawane 2004: 77)

【発掘調査年度】

1985 (IAR 1985-86: 20-21), 1986 (IAR 1986-87: 30-31), 1987 (IAR 1987-88: 19-20), 1988 (IAR 1988-89: 13-17), 1989 (IAR 1989-90: 26)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Hegde, K.T.M., V.H. Sonawane, K.K. Bhan, P. Ajitpresad and K. Krishnan and (1990) "Excavations at Nagwada - 1987-88: A preliminary report", in N.C. Ghosh and S. Chakrabarti (eds.) *Adaption and Other Essays: Proceedings of the Archaeology Conference 1988*. Shantiniketan, Visva-Bharati Research Publications. pp.191-195.

Hegde, K.T.M., V.H. Sonawane, D.R. Shah, K.K. Bhan, P. Ajitpresad, K. Krishnan and S. Prathapachandra (1988) Excavations at Nagwada - 1986-87: A preliminary report. *Man and Environment* 12: 55-65.

(2) その他の参考文献

Bhan, K.K. and Dakshayini Gowda (2003) Shell working at Nagwada (North Gujarat) with special reference to shell industries of the Harappan tradition in Gujarat. *Man and Environment* 28(2): 51-80.

Sonawane, V.H. (1995) "Harappan gold ornaments from Nagwada, Gujarat", in C. Margbandhu and K.S. Ramachandra (eds) *Spectrum of Indian Culture, Prof. S.B. Deo Felicitation Volume*. Agam Kala Prakashan, New Delhi. pp. 84-88

Sonawane, V.H. (2000) "Recently discovered ostrich egg shells from Nagwada, Gujarat", in K.D. Bajpai, Rasesh Jamindar and P.K. Trivedi (eds.) *Gleanings of Indian Archaeology, History and Culture (Professor R.N. Mehta Commemoration Volume)*. Publication Scheme, Jaipur. pp. 14-17.

81 オーリヨー・ティムボー遺跡 Oriyo Timbo

この遺跡では、グジャラート州考古局とペンシルヴァニア大学博物館の共同調査として発掘調査が実施され、細石器石器群およびラングブル遺跡 III 期 (輝赤色磨研土器文化期) 併行期の2つの文化層が

確認されている。

【発掘調査機関】

Gregory Possehl (Pennsylvania University) and C.M. Atri (Gujarat State Department of Archaeology) in 1981-2

Gregory Possehl and M.H. Raval (Gujarat State Department of Archaeology) in 1989-90

【所在地】

Bhavnagar District

【緯度・経度】

21°54'N, 71°32'E (Rissman and Chitalwala eds. 1990)

21°53'12"N, 71°36'16"E (Possehl 1999: 804)

【発掘調査年度】

1981 (Rissman and Chitalwala 1990), 1989-90

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Rissman, Paul C. and Y. M. Chitalwala (1990) *Harappan Civilization and Oriyo Timbo*. Oxford & IBH, New Delhi.

(2) その他の参考文献

82 パーブーマト遺跡 Pabumath

5m に及ぶ文化層を有するこの遺跡では、石積建物遺構とインダス印章、ハラッパー式土器などが出土している (IAR 1977-78, 1978-79, 1980-81)。報文ではポスト文明期の遺跡とされているが、文明期の遺跡と判断してよいであろう。ただし、短い概報のみしか公表されておらず、詳細は不明である。

【発掘調査機関】

Y.M. Chitalwala (Gujarat State Department of Archaeology)

【所在地】

Kachchh District

【緯度・経度】



パーブーマト遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

23°37'N, 70°31'E (Ghosh 1989: 323)

23°37'00"N, 70°31'00"E (Possehl 1999: 805)

23°36'52.6"N, 70°30'09.7"E (GPS)

【発掘調査年度】

1977 (IAR 1977-78: 21), 1978 (IAR 1978-79: 67-8), 1980 (IAR 1980-81: 14)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

83 パードリー遺跡 Padri

キャンベイ湾に面するサウラーシュトラ半島東端部に位置するこの遺跡では、発掘調査の結果、I期：先文明期、II期：文明期、III期：初期歴史時代からなる文化編年が設定されている (Shinde 2004)。

先文明期の下層では粘土で築かれた建築遺構が、上層では粘土と日干煉瓦を併用した建築遺構が検出されている。上層の建築遺構では銅器生産および石器もしくはビーズの製作址に推定される部屋空間が確認されている。先文明期の土器は粗製の彩文土器を特徴とし、パードリー式土器の名称が与えられたが (Shinde and Kar 1992)、アナルタ式土器に共通する特徴を有している (デカン・カレッジの P. Shirvarkal の教示による)。また、先文明期とされた層位からハラッパー文字を刻んだ土器片が出土しているとされるが、この点から判断すると、I期は文明期にかかる時期を含むと考えるのが適切であろう。

文明期には粘土と日干煉瓦を併用した建築遺構が検出されており、ハラッパー式土器が出土する。注目される資料として、獣角を冠した人物像を描いた



パードリー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

大形甕がある (Shinde 1991; Pathak 1992)。

【発掘調査機関】

Vasant Shinde (Deccan College)

【所在地】

Bavnagar District

【緯度・経度】

21°20'21"N, 72°06'32"E (Possehl 1999: 805)

21°20'25.1"N, 72°06'34.0"E (GPS)

【発掘調査年度】

1990 (Shinde 1991), 1991 (IAR 1991-92: 21-22), 1992, 1993 (IAR 1993-94: 34-38), 1994, 1995

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Shinde, V. (1992) Excavations at Padri-1990-91: a preliminary report. *Man and Environment* 17(1): 79-86.

(2) その他の参考文献

Pathak, V. S. (1992) Buffalo-horned human figure on the Harappan jar at Padri: a note. *Man and Environment* 17(1): 87-89.

Shinde, V. (1991) A horn-headed human figure on a Harappan jar from Padri, Gujarat. *Man and Environment* 16(2): 87-89.

Shinde, V. (1992) Padri and the Indus Civilization. *South Asian Studies* 8: 55-66.

Shinde, V. (1998) Pre-Harappan Padri culture in Saurashtra: the recent discovery. *South Asian Studies* 14: 173-182.

Shinde, V. (2004) "Saurashtra and the Harappan sites of Padri and Kuntasi", in Dilip K. Chakrabarti (ed.) *Indus Civilization Sites in India: New Discoveries*. Marg Publications, Mumbai. pp. 64-70.

Shinde, V. (2006) "Padri: the early Harappan site in Gujarat", in D.P. Sharma and M. Sharma (eds.) *Early Harappan and Indus-Sarasvati Civilization*. Kaveri Book, Delhi. pp.151-158.

Shinde, V. and S. B. Kar (1992) Padri ware: A new painted ceramic found in Harappan level at Padri in Gujarat. *Man and Environment* 17(2): 105-110.

Shinde, V. and E. Thomas (1992) A unique Harappan copper fish-hook from Padri, Gujarat. *Man and Environment* 18(2): 145-147.

84 ピタディアー遺跡 Pithadia

試掘調査の結果、2 時期からなる遺跡編年が確認

されている (IAR 1957-58)。I 期はハラッパー式土器と粗製の灰色土器が出土し、II 期には輝赤色土器が出土するとされる。

【発掘調査機関】

P.P. Pandhya (Gujarat State Department of Archaeology)

【所在地】

Rajkot District

【緯度・経度】

21°46'00"N, 70°40'00"E (Possehl 1999: 809)

【発掘調査年度】

1957 (IAR 1957-58: 20-21)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

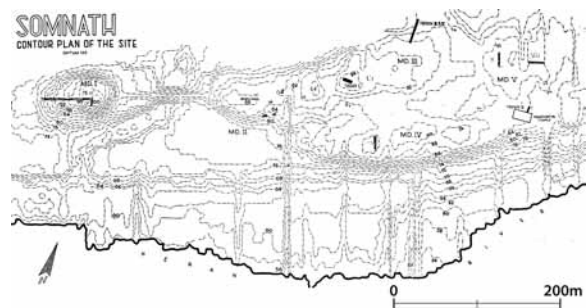
(2) その他の参考文献

85 プラバース・パータン (ソームナート) 遺跡 Prabhās Patan (Somnath)

1956～57年の調査で、I期:ポスト文明期、II期:ポスト文明期(輝赤色土器文化)、III・IV期:初期歴史時代(黒縁赤色土器・北方黒色磨研土器・粗製赤色土器)、V期:歴史時代(赤色磨研土器)、VI期:中世期からなる文化編年が提示された。その後、1971～72年の調査でI期:文明期終末(前2000～前1800年とされる)、II期:ポスト文明期(プラバース式土器、前1800～前1500年とされる)、III期:ポスト文明期(輝赤色土器、前1500～1200年とされる)、IV期:初期歴史時代、VI期:歴史時代からなる新たな遺跡編年が設定されることになった。その後の研究で、文明期以前にさかのぼる文化層(先プラバース文化期)の存在が指摘されるにいたっている (Dhavalikar and Possehl 1992)。

【発掘調査機関】

P.P.Pandya (State Department of Archaeology, Saurashtra)



プラバース・パータン遺跡 平面図

(Nanavati et al. 1971 より)

and B.B. Subbharao (M.S. University of Baroda) in 1955-56
H.D. Sankalia (Deccan College) in 1971, 1975 and 1976

【所在地】

Jamnagar District

【緯度・経度】

20°47'00"N, 70°30'00"E (Possehl 1999: 825)

【発掘調査年度】

1955 (IAR 1955-56: 7-8), 1956 (IAR 1956-57: 16-17), 1971 (IAR 1971-72: 12-13), 1975 (IAR 1975-76: 13), 1976 (IAR 1976-77: 17-18)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Nanavati, J.M., R.N. Mehta and S.N. Chaudhary (1971) *Somnath 1956*. Department of Archaeology, Gujarat State and the M.S. University of Baroda, Baroda.

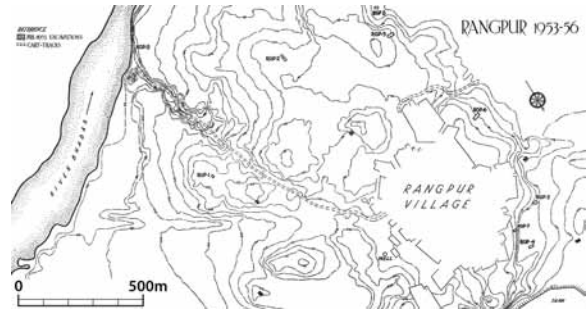
(2) その他の参考文献

Dhavalikar, M.K. and G.L. Possehl (1992) The Pre-Harappan Period at Prabhas Patan and the Pre-Harappan Phase in Gujarat. *Man and Environment* 17(1): 72-78.

86 ラングブル遺跡 Rangpur

1935年に発見されたこの遺跡は、インダス文明の広がりがグジャラート地方のサウラーシュトラ半島にまで及んでいることを明らかにしたことで注目された。S.R. Raoによる1950年代の発掘調査で、I～III期に及ぶ文化編年が設定された。I期は細石器石器群を特徴とする中石器文化期に属し、II期が前3千年紀から前2千年紀に相当する。IIA期は文明期に属し、水平平行線文を特徴とする土器（いわゆるソーラト・ハラッパー式土器）が主体的に出土している。すでにこの段階で黒縁赤色土器が少量ながら出土している。IIB期にもソーラト・ハラッパー系統の土器が出土するが、IIC期からIII期に特徴的となる胴部下半に屈曲部を設けた鉢が初現する。IIC期とIII期を特徴づけるのが輝赤色土器 (Lustrous Red Ware) で、この時期までにはソーラト・ハラッパー系統の土器の要素はきわめて稀薄になる。III期には比較的まとまった量の黒縁赤色土器が出土している。

グジャラート地方の文化編年の基軸としてみなされてきた遺跡であり、特に文明期の終末以降の様相を知る上では依然としてその重要性は高い。RaoはII期とIII期を前2千年紀初頭から前1千年紀初頭



ラングブル遺跡 平面図
(Rao et al. 1962 より)



ラングブル遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

までの年代幅で捉えたが、前3千年紀末ないし前2千年紀初頭から前2千年紀前半のより短い時間幅が適切であろう。

【発掘調査機関】

M.S. Vats (ASI) in 1934-35
G.S. Ghurye (Bombay University) in 1939
M.G. Dikshit (Deccan College) in 1947
S.R. Rao (ASI) in 1953-1956

【所在地】

Surendranagar District

【緯度・経度】

22°26'N, 71°55'E (Ghosh 1989: 370)
22°23'56"N, 71°55'19"E (Possehl 1999: 814)
22°23'57.2"N, 71°55'36.9"E (GPS)

【発掘調査年度】

1934 (Vats 1934-35), 1936 (Ghurye 1939), 1947 (Dikshit 1950), 1953 (IAR 1953-54: 7), 1954 (IAR 1954-55: 11-12), 1956 (Rao 1963)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Vats, M.S. (1934-5) Trial excavations at Rangpur, Limbdi State, Kathiawar. *Annual Report of the Archaeological Survey of India 1934-35*: 34-8.

Ghurje, G.S. (1939) Two sites in Kathiawar. *Journal of the University of Bombay* 8: 1-18.

Dikshit, M.G. (1950) Excavations at Rangpur - 1947. *Bulletin of the Deccan College Research Institute* 11: 3-55.

Rao, S.R. (1963) Excavations at Rangpur and other explorations in Gujarat. *Ancient India* 18-19: 5-207.

(2) その他の参考文献

87 ロージディー遺跡 Rojdi

ロージディー遺跡はサウラーシュトラ半島中央部に広がる高原地帯に位置し、バーダル川の河岸段丘上に立地する。すでに1950年代から1960年代に断続的な発掘調査が実施されていたが、1980年代から1990年代にG.L. Possehlを中心とする調査隊によって発掘調査が実施され、遺跡の変遷が明らかにされた (Possehl and Raval 1989)。

出土土器をもとにA～C期に細分され、C期を中心とする石積建築が検出されている。注目されるのは文明終末期に位置づけられるC期に遺跡全体を囲む石積周壁が築かれることである。

出土土器はソーラト・ハラッパー式土器、砂粒混土器などで、サウラーシュトラ半島の土器編年の基礎資料となっている。Possehlはグジャラート地方の発掘遺跡のC-14測定年代値に基づいてソーラト・ハラッパー式土器の起源を前2500年前後に引き上げるが (Possehl and Herman 1990)、ソーラト・ハラッパー式土器が層位的に文明後半期に位置づけられる遺跡も多く、その起源をめぐって再検討の必要がある。

また、この遺跡では体系的な植物遺存体の採取によって、栽培植物利用形態の復元が行われている (Weber 1991)。

【発掘調査機関】

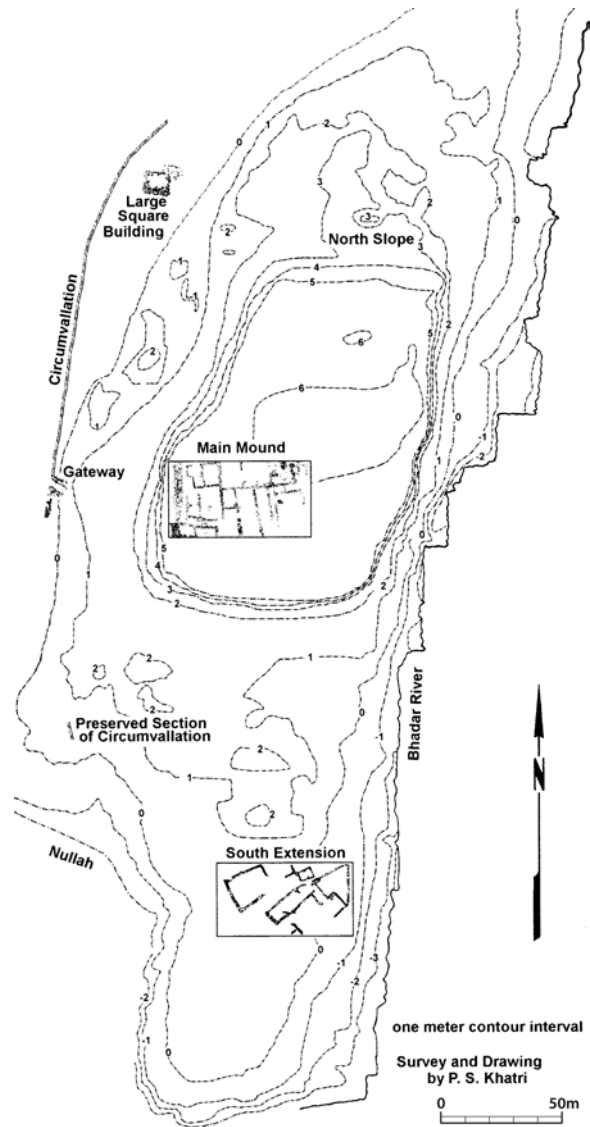
P.P. Pandya (ASI) in 1957-9, M.A. Dhaky (ASI) in 1962-3 and 1964-5

Gregory Possehl (University of Pennsylvania Museum) and M.H. Raval (Gujarat State Department of Archaeology) in 1983-6

Gregory Possehl and D.P. Mahta (Gujarat State Department of Archaeology) in 1992-3

Gregory Possehl and Y.M. Chitalwala (Gujarat State Department of Archaeology) in 1993-4

【所在地】



ロージディー遺跡 平面図

(Possehl 2002 より)



ロージディー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

Rajkot District

【緯度・経度】

21°51'N, 70°54'E (Ghosh 1989: 376)

21°51'47"N, 70°55'08"E (Possehl 1999: 805)

21°51'48.8"N, 70°55'10.3"E (GPS)

【発掘調査年度】

1957 (IAR 1957-58: 18-23), 1958 (IAR 1958-59: 19-21), 1962 (IAR 1962-63: 8), 1964 (IAR 1964-65: 12), 1982 (IAR 1982-83: 28), 1983 (IAR 1983-84: 19-20), 1984 (IAR 1984-85: 18), 1985 (IAR 1985-86: 19), 1992 (Possehl and Mehta 1994), 1993, 1994

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Possehl, G.L., Y.M. Chitalwala, P.C. Rissman and G.E. Wagner (1984) Excavations at Rojdi: 1982-83. *Purātattva* 13-14: 155-163.

Possehl, G.L., Y.M. Chitalwala, P.C. Rissman, G.E. Wagner, P.Cratree and J. Longenecker (1985) Preliminary report on the second season of excavations at Rojdi: 1983-84. *Man and Environment* 9: 80-100.

Possehl, G.L. and D.P. Mehta (1994) "Excavations at Rojdi 1992-93", in Asko Parpola and Petteri Koskikallio (eds) *South Asian Archaeology 1993*. Annales Academiae Scientiarum Fennicae, Helsinki. pp. 603-14.

Possehl, G.L. and M.H. Raval (1989) *Harappan Civilization and Rojdi*. Oxford & IBH, New Delhi.

(2) その他の参考文献

Possehl, G.L. and C.F. Herman (1990) "The Sorath Harappan: A New Regional Manifestation of the Indus Urban Phase", in M. Taddei (ed.) *South Asian Archaeology 1987*. IsMEO, Rome. 295-319.

Weber, S.A. (1991) *Plants and Harappan Subsistence: an Example of Stability and Change from Rojdi*. Oxford & IBH/American Institute of Indian Studies, New Delhi.

88 サントリー遺跡 Santhli

グジャラート北部に位置するこの遺跡は砂丘地帯に位置しており、サントリー II 遺跡で発掘調査が実施されている (IAR 1993-94)。2 時期の文化層が確認されており、I 期は細石器石器群を特徴とする中石器文化期、II 期は墓葬を特徴とする金石併用文化期に位置づけられている。墓葬は二体合葬墓と幼児墓各 1 基からなる。墓葬から出土する土器はナーグワダー遺跡やモーティ・ピープリー遺跡から出土した土器に共通するもので、初期ハラッパー文化段階に位置づけられている (Ajithprasad 2002)。

【発掘調査機関】

V.S. Parekh, V.H. Sonawane (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Banaskantha District

【緯度・経度】

23°54'10"N, 71°30'00"E for Santhli-I

23°54'00"N, 71°29'10"E for Santhli-II

23°53'50"N, 71°29'00"E for Santhli-III

23°54'00"N, 71°28'50"E for Santhli-IV

23°54'00"N, 71°30'20"E for Santhli-VI

23°54'15"N, 71°29'50"E for Santhli-V

(Possehl 1999: 819).

【発掘調査年度】

1993 (IAR 1993-94: 25-31), 1994 (IAR 1994-95: 11-16)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

Ajithprasad, P. (2002) "The Pre-Harappan Cultures of Gujarat", in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect vol.I: Prehistory*. ICHR/Manohar, New Delhi. pp. 129-158.

89 シカールプル遺跡 Shikarpur

カッチ湾奥部に位置するこの遺跡では、1987～1989年の調査で文明期を中心とする遺跡であることが確認された。3つの小マウンドからなるこの遺跡は、南北 224m、東西 236m を測る。発掘調査の結果、3～4 時期の構築時期からなる遺構群が検出され、下層では日干煉瓦積建物、上層では石積建物が検出されている。

2007 年からマハーラージャ・サヤジラオ大学によって発掘調査が実施されており、遺跡を囲繞す



シカールプル遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

ると推定される日干煉瓦積周壁が確認されている
(同大学の P. Ajithprasad の教示による)。

【発掘調査機関】

M.H. Raval (Department of Archaeology, Government of Gujarat)

【所在地】

Kachchh District

【緯度・経度】

23°16'N, 70°41'E (IAR 1987-88: 14)

23°07'00"N, 70°35'00"E (Possehl 1999: 805)

23°14'15.3"N, 70°40'37.5"E (GPS)

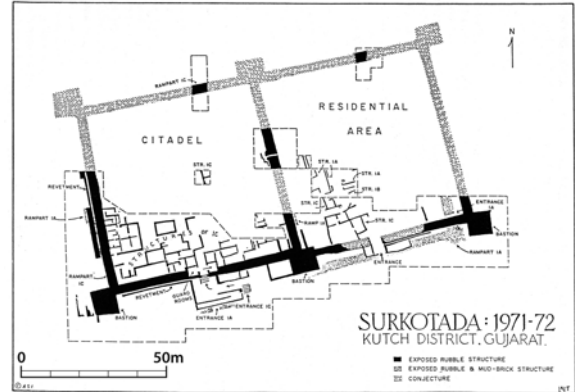
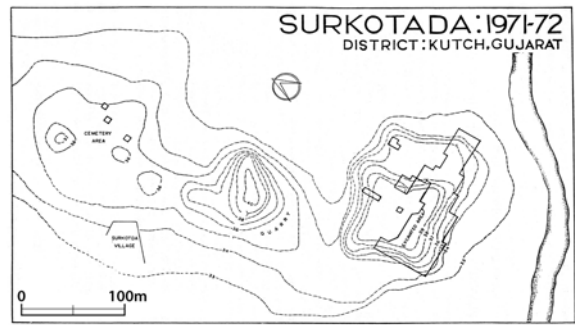
【発掘調査年度】

1987 (IAR 1987-88: 14-15), 1988 (IAR 1988-89: 10), 1989 (IAR 1989-90: 20-21)

【参考文献】

- (1) 発掘報告書
- (2) その他の参考文献

Thomas, P.K., P.P. Joglekar, Arti Deshpande-Mukherjee and S.J. Pawankar (1995) Harappan subsistence patterns with special reference to Shikarpur, a Harappan site in Gujarat. *Man and Environment* 20: 37-42.



スールコータダー遺跡 平面図

(Joshi 1990 より)

90 スールコータダー遺跡 Surkotada

カッチ地方のリトル・ラン湿原に面するところに位置するこの遺跡では、発掘調査の結果、それぞれ石積および日干煉瓦積を併用した周壁によって囲まれた城塞部と居住区域に推定される区画が東西に接続した平面形態が確認されている (Joshi 1993)。建築遺構は関連層序および出土土器から IA ~ IC 期に細分されている。周壁は IA 期から築かれているが、平面形の詳細が明らかにされた IC 期には、隅角部および城塞部と居住域の接する部分に稜堡が設けられ、城塞部南側周壁には大規模な城門施設が築かれている。城塞部、居住域ともに内部では石積を中心とする建築遺構が検出されている。

出土遺物には、土器のほかにローフリー産チャート製石刃石器、準貴石製ビーズ、銅器、骨器、凍石製インダス印章 (1 点)、土製印章 (1 点) など多様である。ビーズには未成品が含まれるとともに、また海産性貝を用いた腕輪の製作に関わる残滓も出土しており、明確な工房域は確認されなかったものの、装身具生産が行われていたことを示している。

出土土器でみると、IA・IB 期にはハラッパー式



スールコータダー遺跡

(撮影：上杉彰紀 ©インダス・プロジェクト)

土器とアナルタ式土器、IC 期にはソーラト・ハラッパー式土器と黒縁赤色土器および砂粒混凝土器が出土する。IA 期のハラッパー式彩文土器には G. Quivron

編年の古段階から中段階に相当する資料が含まれる。また、IB 期には中段階以降のハラッパー式彩文土器が出土する。

また、集落域の北約 300m のところで墓地が確認されており、4 基の墓葬が発掘されている。墓坑内でわずかに人骨片が確認されたのは 2 基であるが、いずれからも土器もしくは土器片が出土している。墓坑を埋めたあとに、地表面の高さに板石を被せるものと、石塊を集積させたものがある。出土土器は報告者によれば集落域の IA 期に相当する特徴をもつとされるが、公表された実測図からみると、ナーグワダー遺跡やモーティ・ピープリー遺跡、サーントリー遺跡出土の土器に類似する。

この遺跡の調査ののち、カッチ地方ではドーラーヴィーラー遺跡が発掘され注目を浴びることになったが、小規模ながらもスールコータダー遺跡もカッチ地方における文明期の様相を考える上で重要である。

【発掘調査機関】

Jagat Pati Joshi (ASI)

【所在地】

Kachchh District

【緯度・経度】

23°37'N, 70°50'E (Ghosh 1989: 424)

23°37'00"N, 70°50'00"E (Possehl 1999: 805)

23°36'40.7"N, 70°55'02.3"E (GPS)

【発掘調査年度】

1970 (IAR 1970-1: 13-15), 1971 (IAR 1971-2: 13-21)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Joshi, J.P. (1990) *Excavation at Surkotada 1971-72 and Exploration in Kutch*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.87. Archaeological Survey of India, New Delhi.

(2) その他の参考文献

Bökönyi, S. (1997) Horse remains from the prehistoric site of Surkotada, Kutch, Late 3rd Millennium B.C. *South Asian Studies* 13: 297-307.

Meadow, Richard H. and Ajita K. Patel (1997) A comment on 'horse remains from Surkotada' by Sandor Bökönyi. *South Asian Studies* 13: 308-315.

Possehl, G.L. (1997b) "The date of the Surkotada cemetery: a reassessment in light of recent archaeological work in Gujarat", in J.P. Joshi (ed.) *Facets of Indian Civilization - Recent Perspective*. Aryan Book International, Delhi. pp.

81-87.

Sharma, A.K. (1974) Evidence of horse from the Harappan settlement at Surkotada. *Purātattva* 7: 75-76.

91 ターラーグダ遺跡 Taraghdā

小規模な発掘調査が行われており、プラバース式土器に類似する土器が出土している。

【発掘調査機関】

Gujarat State Department of Archaeology

【所在地】

Rajkot District

【緯度・経度】

21°44'00"N, 70°26'00"E (Possehl 1999: 827)

【発掘調査年度】

1978 (IAR 1978-9: 68)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

92 ヴァーガド遺跡 Vagad

この遺跡はサウラーシュトラ半島内陸部からキャンベイ湾に向って流下するバーダル川下流域に位置する遺跡である。南北 450m、東西 300m の中規模遺跡であるが、発掘調査の結果、厚さ 1m の文化層に IA ~ C 期に細別される文化層序が確認されている。検出された遺構は平面円形の平地式小屋状住居で柱穴を伴う。また、その床面に大形の甕が埋設された貯蔵施設や炉址が確認されている。

土器のほかに、各種素材のビーズ、各種土製品、銅製品、石製および土製のおもり各 1 点 (26.580g および 32.530g)、磨石・石皿などの遺物が出土している。土器はソーラト・ハラッパー式土器を主体としており、ラングブル遺跡 IIA・IIB 期、ロータル遺跡 B 期、ロージディー遺跡 A・B 期、スールコータダー IC 期との併行関係が指摘されている (Sonawane and Mehta 1985)。

【発掘調査機関】

V.H. Sonawane and R.N. Mehta (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Ahmedabad District

【緯度・経度】

22°19'00"N, 71°52'00"E (Possehl 1999: 832)

【発掘調査年度】

1981 (Sonawane and Mehta 1985)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sonawane, V.H. and R.N. Mehta (1985) Vagad - a rural Harappan settlement in Gujarat. *Man and Environment* 9: 38-44.

(2) その他の参考文献

93 ヴァラビー遺跡 Valabhi

サウラーシュトラ半島東部に位置するこの遺跡は200×200mの小規模遺跡で、試掘調査の結果、厚さ0.50m以下の薄い文化層から平面円形の平地式小屋状建物遺構2基と、土器、ウシ・シカからなる動物遺存体が出土している。

発掘者は付近が夏季に洪水が頻発する地域で定住生活には不適であることと、実際に発掘された小屋状建物および動物遺存体などから、遊牧キャンプの遺跡と推定している。

【発掘調査機関】

R.N. Mehta (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Bhavnagar District

【緯度・経度】

21°53'00"N, 71°53'00"E (Possehl 1999: 832)

【発掘調査年度】

1979 (IAR 1979-80: 24)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Mehta, R.N. (1984) "Valabhi: A station of Harappan cattle breeders", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds) *Frontiers of the Indus Civilization*. Books and Books, Delhi. pp. 227-230.

(2) その他の参考文献

94 ワルターン遺跡 Warthan

試掘調査の結果、下層から黒色彩文土器、上層から黒縁赤色土器が出土している (IAR 1961-62)。短い報文のみであり、詳細は不明である。

【発掘調査機関】

K.V. Soundara Rajan (ASI)

【所在地】

Surat District

【緯度・経度】

21°22'00"N, 72°51'00"E (Possehl 1999: 834)

【発掘調査年度】

1961 (IAR 1961-62: 1)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

(2) その他の参考文献

95 ゼーカダー遺跡 Zekhada

グジャラート北部に位置するこの遺跡では、発掘調査の結果、平面円形の小屋状建物遺構とハラッパ式土器およびポスト文明期のグジャラート地方の土器に類似する土器が出土している。文明期の村落遺跡の発掘事例として重要である。

【発掘調査機関】

R.N. Mehta (M.S. University of Baroda)

【所在地】

Banaskantha District

【緯度・経度】

23°40'N, 71°20'E (Ghosh 1989: 470)

23°51'00"N, 71°28'00"E (Possehl 1999: 834)

【発掘調査年度】

1977 (IAR 1977-8: 20-21)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Momin, K.N. (1981) Excavation at Zekhada. *Purātattva* 12: 156-157.

(2) その他の参考文献

マハーラーシュトラ州 Maharashtra

マハーラーシュトラ州域では、前3千年紀から前2千年紀にかけて、サウルダ文化、マールワー文化、ジョールウェー文化に代表されるデカン金石併用文化が知られるが、そのうちサウルダ文化とマールワー文化の間にダーイマーバード文化と呼ばれる文化が設定されている。このダーイマーバード文化は文明期のグジャラート地方における土器様式の系

譜にあるということで、「後期ハラッパー文化」に含まれるが、その評価はグジャラート地方における詳細な土器様式の変化の把握なくしては不可能であり、今後のさらなる検討を要する課題である。

96 ダーイマーバード遺跡 Daimabad

デカン金石併用文化を代表する遺跡の一つであるダーイマーバード遺跡では、II期の段階においてグジャラート地方の後期ハラッパー式土器に類似する土器のほかに、インダス文字を刻んだボタン形土製印章2点と同じくインダス文字を刻んだ土器片3点が出土している。ポスト文明期の段階においてグジャラート方面との交流があったことを示す重要な例である。また、このII期からは日干煉瓦積建物および粘土造建物、日干煉瓦積の墓が検出されている。続く時期以降の居住活動にともなって建物遺構の遺存状況は悪く、その平面形態の詳細は不明である。一方、墓に用いられた日干煉瓦は32×16×8cm、28×14×7cmという4:2:1の比率を示しており、グジャラート方面の影響によるものかもしれない。なお、I期はサワルダ文化期、III期はダーイマーバード文化期、IV期はマールワー文化期、V期はジョールウェー文化期である。

【発掘調査機関】

M.N. Deshpande (ASI) in 1958-9

S.A. Sali (ASI) in 1974-9

【所在地】

Ahmednagar District

【緯度・経度】

19°31'N, 74°42'E (Ghosh 1989:111)

19°31'00"N, 74°42'00"E (Possehl 1999: 750)

【発掘調査年度】

1958 (IAR 1958-9: 15-18), 1974 (IAR 1974-5: 29-31),

1975 (IAR 1975-6: 31-34), 1976 (IAR 1976-7: 34-38), 1977

(IAR 1977-8: 34-37), 1978 (IAR 1978-9: 46-52)

【参考文献】

(1) 発掘報告書

Sali, S.A. (1986) *Daimabad 1976-79*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no.83. Archaeological Survey of India.

(2) その他の参考文献

Dhavalikar, M.K. (1969-70) Daimabad - A Rediscovery. *Purātattva* 3: 34.

Dhavalikar, M.K. (1982) "Daimabad Bronzes", in G.L.Possehl

(ed.) *Harappan Civilization: A Contemporary Perspectives*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.421-426.

Joshi, R.V., B.C. Deotare and A.A. Kashirsagar (1979-80) Chemistry of Deccan Chalcolithic Deposits from Daimabad and Inamgaon. *Purātattva* 10: 80.

Sali, S.A. (1980-81) A Unique terracotta Figurine from the Jorwe Levels of Daimabad. *Purātattva* 11: 183.

Sali, S.A. (1982) "The Harappans of Daimabad", in G.L. Possehl (ed.) *Harappan Civilization: A Contemporary Perspectives*. Oxford IBH and the American Institute of Indian Studies, New Delhi. pp.175-184.